令和元年度

地域との協働による高等学校教育改革推進事業

「地域魅力化型」

研究実施報告書

第１年次

岩手県立大槌高等学校

地域に拓く学び

岩手県立大槌高等学校
校長　瀬　戸　和　彦

東日本大震災津波から９年が経過し、大槌町の復興は目に見える形で着実に進んでいる。しかし、震災当時１万５千人ほどいた町民は現在１万１千人となり、県内では最大の減少率となっている。子どもの数も減少しており、大槌高校の入学者数は大幅な減少を続け、将来的な高校の存続が危ぶまれている。そうした状況を踏まえ大槌町は、大槌高校の魅力化を図ることで安定的な存続を実現するため「大槌高校魅力化構想会議」を設置し、平成３１年４月から魅力化推進員３名を高校に派遣した。

魅力化推進員の派遣と期を同じくして、本事業「地域との協働による高校教育改革推進事業(地域魅力化型)」の指定を受け、地域と連携しながら三陸沿岸部の復興へ向けて地域の中核となって活動し、将来を担う人材の育成に取り組みはじめた。令和元年度に創立１００周年を迎え新しい歩みをはじめた大槌高校にとって魅力化構想と地域協働事業は学校運営の２本柱となった。

これまでの大槌高校は、挨拶や整容の指導に重きを置き、インターンシップなどを実施しながら高校卒業後に即戦力として社会を支える人材の育成に力を注いできた。また、大学等への進学を希望する生徒のために、生徒の学力や教員の指導力の向上に努めてきた。しかし、最近は学校を取り巻く社会の変化や求められる学力観の変化、なにより生徒自身の変化が著しい。こうした中、地方の小規模校である大槌高校が、Society5.0 に代表される未来社会へ対応するための個に応じた学習への転換など、新しい学習体系構築に取り組むことが学校の魅力化に繋がっていると考える。これまで閉じていた学習の場を地域に開き、地域と共に生徒を育て、高校を含む地域全体を学びの場とすることが地域協働事業の本質であり、将来を主体的に生きる生徒を育てることが狙いである。

派遣された３名の推進員が中心となり、総合的な探究の時間や地域との連携を企画・運営した。様々な新しい企画が提案され、これまでにはなかった取組が実施された。推進員のはたらきはもちろんだが、一緒に取り組んだ教職員の活躍も素晴らしいものがあった。生徒のプレゼン指導から始まり、講師招聘、３ヶ月におよぶ行政シミュレーションゲームのサポート、そして地域課題探究マイプロジェクトの伴走など多岐にわたるものであった。そうした教職員の頑張りの原動力となったのは日々の生徒の成長である。取り組みの成果はしっかりと生徒の変容に現れ、特にも２月に開催されたマイプロジェクトアワード岩手 summit では、個人を含む全５２チームが出場するなか、本校の６チームが決勝プレゼンに進出し、最終的に２チーム２名が全国サミットへの切符を勝ち取った。魅力化と地域協働事業を始めて１年目の成果としては十分満足できるものである。

現在は校内にワーキンググループを作り、２年目以降に向けて検討を始めている。検討内容は「カリキュラムマネジメント」「校則および部活動」「探究活動と評価方法」。１年目の成果に満足せず、この事業をブラッシュアップしながら進めていき、魅力ある新しい学校づくりを続けていく。

目　次

地域に拓く学び・・1
目次・・・2

Ⅰ　研究開発実施報告（概要）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
大槌高校地域協働事業イメージ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
成果概要図・・・5
ロジックモデル・・6
研究開発実施状況報告書・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

Ⅱ　研究開発の内容（詳細）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ １７
１　大槌高校魅力化構想会議とコンソーシアムについて・・・・・・・・・・・・１８
２　学校設定科目「三陸みらい探究」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ２３
（１）　概要
（２）　１学年三陸みらい探究
ア　概要
イ　年間計画
（ア）　自分プレゼン
（イ）　第１回大槌発みらい塾
（ウ）　シミュレーションおおつち 2030（SIM おおつち 2030）
（エ）　第２回大槌発みらい塾 with 慶応大学生
（オ）　三陸復興ラーニングジャーニー
（カ）　第３回大槌発みらい塾（メディアリテラシー授業）
（キ）　ちょこっとマイプロジェクト
（３）　２学年総合的な学習の時間（模擬三陸みらい探究）
ア　概要
イ　年間計画
（ア）　テーマ設定
（イ）　プロジェクト実施
（ウ）　プロジェクト実践事例
３　目標の進捗状況、成果、評価・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４５
４　先進校視察訪問・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４８
第１回　島根県立津和野高等学校
第２回　福島県立ふたば未来学園高等学校①
第３回　福島県立ふたば未来学園高等学校②

Ⅲ　新聞記事・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５７

Ⅰ　研究開発実施報告（概要）

地域との協働による高等学校教育改革推進事業　**地域魅力化型**

大槌高校三陸復興みらい創造プロジェクト（大槌高校魅力化構想）

東日本大震災津波によって壊滅的な被害を受けた
三陸沿岸部の復興を担い、リードする人材の育成
を地元の教育資源を活用しながら地域との協働により進める。

復興研究会

- 定点観測班
- 他校交流班
- 防災町づくり班
- キッズステーション班
- 広報班

発展

大槌学園 吉里吉里学園 『ふるさと科』

継承・発展

事業での取り組み

学校設定科目「三陸みらい探究」

三陸沿岸部の地域課題を「防災」「町づくり」「環境自然」の三つの観点から捉え、考察し、行動し、発信する。

「三陸ラーニングジャーニー」

東日本大震災津波からの復興に取り組む先進地域を訪問し、交流する。

「大槌発みらい塾」

地域に貢献する職業人を招き、職業体験や職業観を語ってもらう。

教科横断的な取り組みで、「主体的・対話的で深い学び」を実現

大槌高校の魅力化に取り組む魅力化推進員を三名配置。
カリキュラム開発等専門家と地域協働学習実施支援員を兼務させる。

☆ 育む力 ☆

①大槌町を基点として、震災後の三陸沿岸地方の新たなまちづくりの中心となるリーダーを育成する。
（リーダーシップ）

②三陸沿岸部の生活に密着した身近な問題を自分事と捉え、その解決へ向けて積極的に行動し、発信する能力を養う。
（町づくり）

③東日本大震災津波の経験を伝承し、自らの課題をして捉え、地域の防災活動の中心として活躍できる人材を育成する。
（防災）

④三陸沿岸部の豊かな自然を様々な角度から捉え、その活用方法を考える中で、郷土への愛着を育む。
（自然環境）

岩手県教育委員会

地域協働事業コンソーシアム

大槌高校魅力化構想会議

高校	地域	地元企業	自治体	中高連携	有識者	学術機関
大槌高校 PTA 大槌高校同窓会	大槌町商工会 おらが大槌夢広場	千田精密工業	大槌町	大槌学園 吉里吉里学園	カタリバ	東京大学 国際沿岸海洋研究センター

大槌町が中心となって高校の魅力化をバックアップ

運営指導委員会

大槌高校三陸復興みらい創造プロジェクト（大槌高校魅力化構想）

事業背景	①高校が存置する大槌町は、東日本大震災津波によって壊滅的な被害を受け、**復興を担うリーダーの育成が急務(震災復興)** ②県内最大の人口減少率であり、地域貢献意欲が高い、地域を支える人材の育成が急務である(**地域を支えるリーダーの育成**)
魅力化コンセプト	大海を航る、大槌(ハンマー)を持とう
目指す人物像	**自立**　意志がある　課題をジブンゴトにし、主体的に探究・行動が出来る人 **協働**　仲間とともにある　他の価値観や文化等の多様性を受容し違いを越えて共創できる人 **創造**　逆境から創りだす　予測できない未来や想定外など逆境においても新しい価値を創りだす人

（町設置）大槌高校魅力化構想会議 → 魅力化推進員派遣

カリキュラム開発専門家１名
地域協働学習支援員２名

コンソーシアム（管理機関：岩手県教育委員会）

- 町行政
- 商工会
- 町教委
- 高校PTA
- 大槌高校
- 認定NPOカタリバ
- 東京大学海洋研究所
- 町立学校
- おらが大槌夢広場

[校内体制]教員全員が所属するワーキンググループを設置。コンソーシアムと連動して魅力化を推進

令和元年度目標と取り組み

①コンソーシアムの設置

○コンソーシアムが主導となりビジョンを策定
- 大槌高校魅力化構想策定
- 地域/教員/生徒の参加する魅力化検討会議の開催

○教育課程の具体的な連携
- 総合的な探究の時間の中高連携
- 研究機関(東京大学)との連携による地域資源の海を題材とした探究学習

②学校設定科目「三陸みらい探究」の設定

○「SIMおおつち2030」
- 町行政と連携しヒアリングに行くなど町の事業題材としたまちづくり学習

○「三陸復興ラーニングジャーニー」
- 三陸の他地域の復興への取り組みを視察することで自身のテーマを探る契機に

1年生(2単位)※2	2年生(2単位)	3年生(1単位)
地域を舞台に自分の興味関心を知る	身近な自分のテーマを探究する(マイプロの実践)	生き方・未来に地域を舞台とした探究をつなげる

次年度に向けて

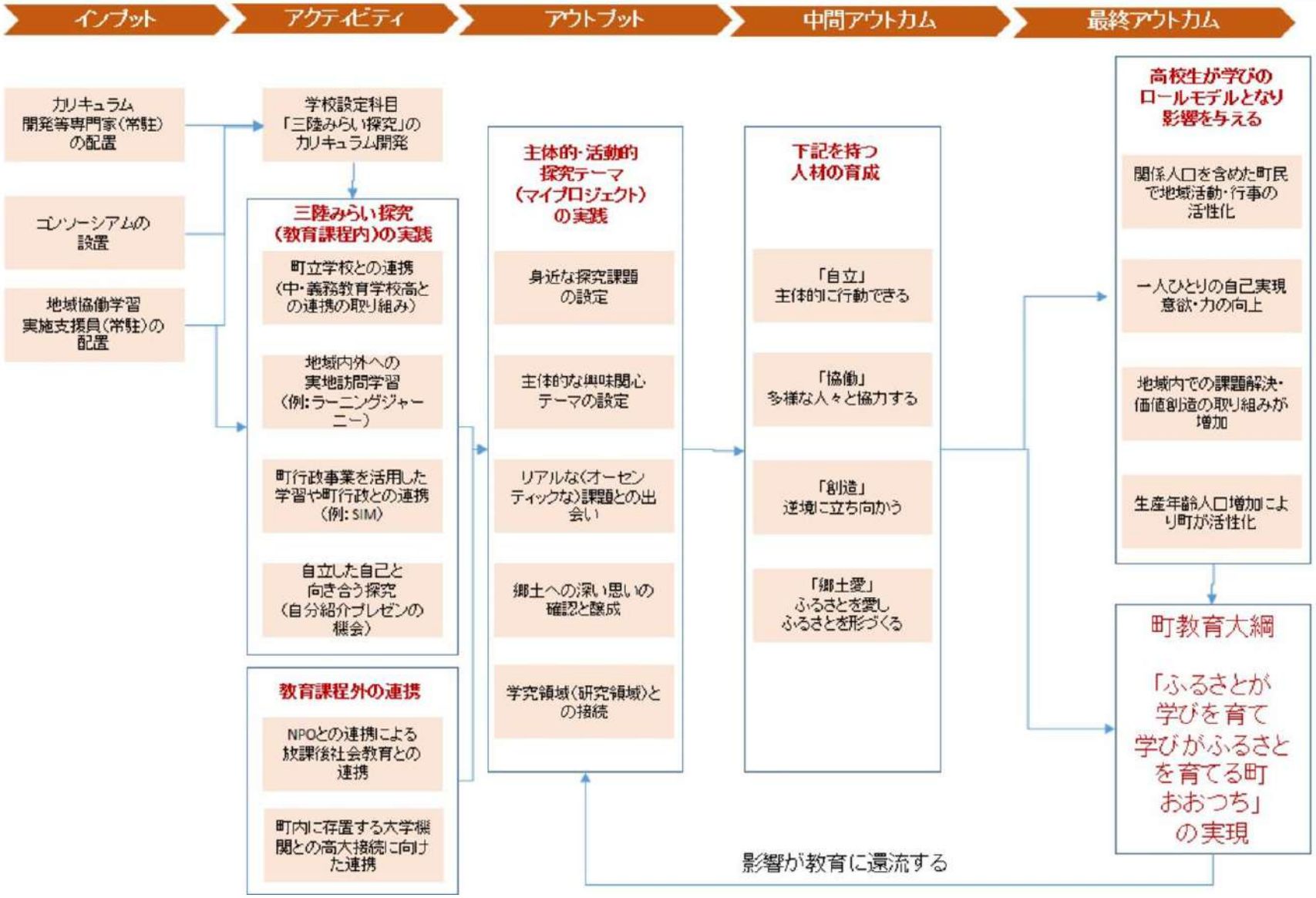
ワーキンググループを設置し、コンソーシアムと議論を重ね、魅力化を推進

○カリキュラム開発
- 地域資源を活用したカリキュラムの検討（教科を中心とした地域を題材とした学校設定科目の設置）

○生活全般検討
- 校則について生徒が主体となり再検討（地域の意見を反映したルールメイキング）
- 地域が支える部活動のあり方の検討

○三陸みらい探究の深化と社会教育との連携
- ３年間を見通した三陸みらい探究のカリキュラム検討と、ルーブリック活用した評価の検討
- 総合探究を軸とした社会教育（カタリバや社会教育施設との連携協働）

ロジックモデルの作成（岩手県立大槌高等学校）



研究開発実施状況報告書

１　事業の実施期間

令和元年５月３１日（契約締結日）～　令和２年３月３１日

２　指定校名・類型

学校名　　岩手県立大槌高等学校

学校長名　瀬戸　和彦

類型　　地域魅力化型

３　研究開発名

大槌高校三陸復興みらい創造プロジェクト（大槌高校魅力化構想）

４　研究開発概要

①　「三陸みらい探究」（学校設定科目）

三陸沿岸部の地域課題について探究し、地域のリーダーを育成する。

②　「三陸復興ラーニングジャーニー」

復興に取り組む市町村や学校を訪問し、復興課題に取り組むための視野を広げる。

③　「大槌発みらい塾！」

大槌町内外の職業人に職業観や職業体験を語ってもらい、人生設計の一助とする。

５　教育課程の特例の活用の有無

学校設定科目「三陸みらい探究」を設定し、１学年２単位、２学年２単位、３学年１単位を実施し、１学年は「総合的な探究の時間」を「三陸みらい探究」に代替するとともに、「社会と情報」２単位から１単位を減じて「三陸みらい探究」に代替する。

６　管理機関の取組・支援実績

（１）コンソーシアムについて

大槌高校では町が主体となり平成 30 年 12 月に大槌高校魅力化構想会議を設置し、本会議を母体として、令和元年７月に岩手県教育委員会が主体となりコンソーシアムを設置した。

①コンソーシアムの構成団体

東京大学大気海洋研究所 国際沿岸海洋研究センター	大槌町	大槌町議会
大槌町教育委員会	大槌町商工会	大槌高校 PTA
認定 NPO 法人カタリバ	大槌町立学校長会	岩手県教育委員会（事務局）

②活動日程・活動内容

本事項ではコンソーシアムの取り組みと大槌高校魅力化構想会議の取り組みは相互に関連する取り組みとなるため、大槌高校魅力化構想会議の取り組みについても列記する。

活動日程	活動内容
令和元年７月１１日～１３日	島根県立津和野高等学校を視察（地域と連携した総合探究、放課後の社会教育活動、公営塾の見学）
令和元年７月１８日	コンソーシアムを組織
令和元年７月１８日	第１回コンソーシアム会議 ・コンソーシアムの設置要綱、令和元年度の事業計画や予算案を承認
令和元年７月１８日	第３回大槌高校魅力化構想会議 ・前回会議からの経過と大槌高校魅力化構想懇談会に関する説明
令和元年７月１８日	第１回大槌高校魅力化構想懇談会 ・大槌町住民と大槌高校とで育てたい高校生像に関する熟議（参加者 110 名）
令和元年１１月１３日	第４回大槌高校魅力化構想会議 ・大槌高校魅力化骨子を決議
令和元年１１月２０日	福島県立ふたば未来学園高等学校を視察（教科と連動した総合探究、クロスカリキュラム、NPO 法人と連携した探究学習の設計）
令和２年２月４日	福島県立ふたば未来学園高等学校 SGH 発表会に参加（NPO 法人と連携した高校生の社会教育における探究学習の実践を見学）
令和２年３月２８日～２９日 （　中　止　）	認定 NPO 法人カタリバ主催 全国高校生マイプロジェクトアワードを視察（探究学習における他高校の事例研究）

（２）カリキュラム開発等専門家又は海外交流アドバイザーについて

①指定した人材・雇用形態・高等学校における位置付けについて

認定 NPO 法人カタリバ 菅野祐太（町から NPO への業務委託）　　週５日常駐

②活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
毎月１回	大槌高等学校の職員会議に出席 ・魅力化の取り組みの進捗や運営指導委員会やコンソーシアム等開催された会議の内容を共有

毎週１回	１学年の学校設定科目「三陸みらい探究」の運営 ・学年団教員との打ち合わせし、次回の授業の方針を決定 ・週２コマの授業を担当
不定期	上記、コンソーシアム魅力化に関する会議の企画運営
令和元年５月１６日 令和元年９月１８日	教職員向け魅力化協議研修会の開催 ・魅力化で育てたい高校生の姿 ・魅力化を進めるためのコンセプト

（３）地域協働学習実施支援員について

①指定した人材・雇用形態・高等学校における位置付けについて

認定 NPO 法人カタリバ 起塚拓志（町から NPO への業務委託）　週５日常駐

認定 NPO 法人カタリバ 三浦奈々美（町から NPO への業務委託）　週４日常駐

②実施日程・実施内容

日程	内容
毎月１回	大槌高等学校の職員会議に出席 ・魅力化の取組についての共有
毎週１回	２学年の総合学習の運営 ・学年団教員との打合わせし次回の授業の方針を決定 ・週１コマの授業を担当
令和元年７月５日 令和元年９月 12 日 令和２年１月 24 日	「大槌発みらい塾！」の企画運営 ・地域の方々による１・２学年向け職業講話 ・慶應義塾大学学生による１・２学年向け授業 ・日本テレビ記者によるニュースリテラシー授業
令和元年 10 月 15 日	地域と連携した大槌高校文化祭における地域との調整

（４）運営指導委員会について

①運営指導委員会の構成員

所　属・役職等	氏名
東京大学教育学部 教授	牧　野　　篤
岩手大学農学部 教授	廣　田　純　一
東京大学国際沿岸海洋研究センター 准教授	田　中　　潔
おらが大槌夢広場 代表理事	神　谷　未　生
認定 NPO 法人カタリバ 代表理事	今　村　久　美
大槌町教育委員会教育長	沼　田　義　孝
大槌町立大槌学園　学園長	松　橋　文　明
大槌町立吉里吉里学園中学部 校長	金　野　　節

②活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和元年１１月１２日	第１回会合 ・学校設定科目「三陸みらい探究」の授業見学 ・研究計画に対する専門的見地からの指導・助言
令和２年２月６日	第２回会合 ・研究成果の評価・分析と、次年度以降へ向けての指導助言

（５）管理機関における取組について

①管理機関（コンソーシアム含む）における主体的な取組について

・大槌町よりカリキュラム開発等専門家１名、地域協働学習実施支援員２名の配置

・管理機関による、継続的な取組を行うための教職員の加配１名

②事業終了後の自走を見据えた取組について

大槌町では、大槌町教育大綱（平成 30 年３月公示）、大槌町第９次総合計画（令和元年３月公示）、大槌町子供の学び基本条例（令和元年３月公示）において「地域を舞台とした魅力的な高校教育の実現」を示しており、上述の通り町独自の予算で高校魅力化推進員を３名配置した。また令和元年 11 月には、大槌高校魅力化構想骨子を示し、町と高校、地域が拠って立つべき指針を明らかにしたところであり、事業終了後も積極的に本取組を行っていく。

③高等学校と地域の協働による取組に関する協定文書等の締結状況について

大槌町と大槌高校は「震災伝承推進活動に関する協定」を交わし、町の文化交流施設

に本校の特徴的な取組である復興研究会の常設展示を行っている。

7　研究開発の実績

（1）実施日程

実施項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
「三陸みらい探究」における～地域での探究学習							1回		1回			
地域や職業人、大学の研究に関する講話				1回		1回				1回		1回
町立中学校との合同授業			1回									

（2）実績の説明

①研究開発の内容や地域課題研究の内容について

（ｉ）大槌高校魅力化構想骨子の策定

大槌高校では、本事業のさらなる推進のため、子供、高等学校、保護者、地域、町行政などの各関係機関が拠って立つべき指針を「大槌高校魅力化構想骨子」としてまとめた。

［研究の背景］

策定にあたり前提にすべき社会の背景を(ｱ)技術革新（Society5.0）、(ｲ)人生100年時代、(ｳ)広がる格差とし、また岩手県の示した総合計画や教育振興計画を参酌し、大槌高校が存置する大槌町の課題として(ｱ)東日本大震災からの復興、(ｲ)進む人口減少、(ｳ)大槌高校が統廃合となった場合の社会・経済的損失の大きさを挙げ、地域と協働した魅力ある大槌高校改革の必要性を明らかにした。

［設定した目指す人材像］

上記の背景より、大槌高校で育成すべき人材像を以下のように設定した。

・意志がある（自立）

自らの志を深め、物事を探究する意欲を持ち、自らの進むべき道や地域社会の課題をジブンゴトとして、主体的に行動ができる人

・仲間とともにある（協働）

世代や地域、言語が異なる人との交流を通して、他の価値観や文化等の多様性を受容し、立場の違いを越えて共創することができる人

・逆境から創りだす（創造）

予測できない未来や想定外のこと、困難な状況を乗り越えるためのしなやかな心を持ち、必要に応じて助けを求め、体験から学びを得ようとする姿勢を持ち合わせ、新しい価値を創ることができる人

［目指す人材像が育まれる大槌の地域性］

上記の目指す人材を育むため、地域・高校・町行政・保護者など高校生を取り巻く関係機関が持つべき学びの土壌を大槌の自然に準えて以下の４つに設定した。

①　海　ー地　域ー
②　空　ー希　望ー
③　山　ー多様性ー
④　風　ー挑　戦ー

［学校の目指す姿］

また大槌高校が目指すべき指針を以下のように設定した。

①生徒一人ひとりの目標が応援されそれぞれの持つ強み（大槌（ハンマー））を見つけられる学校

②未来社会に生きる力をつける学校

③多様な価値観で多様な個性を支える学校

④地域が学びを育て、学びが地域を育てる学校

（ⅱ）学校設定科目「三陸みらい探究」の開発

今年度より学校設定科目として設置した三陸みらい探究では以下のように取組を行った。三陸みらい探究では、２学年において各生徒がテーマを設定して行うプロジェクト学習を実施する予定であり、１学年ではその準備段階として、自己理解活動や大槌町の行政課題を知る活動、課題解決の事例視察や体験活動等の機会を設定した。

時　期	内　容	各単元のねらい（連続性）
４月～５月	自分紹介プレゼンテーション ［目的］今後の探究を進めていくために必要な自ら課題を設定する力を育むためには、自己発見・自己理解を通して自分なりの視点を獲得する。 ［内容］自分を紹介するプレゼンテーションを作成し、町内の中学生に発表する。	［自分を内省し表現する］ ・相手に伝わるよう表現することを通じて自己を内省する。
６月	大槌発未来塾 ［目的］町内外の多様な年代の方々との交流や価値観の触れ合いを通して、自らの生き方・考え方を見つめ、今後の進路・自らの未来を考える材料とする。 ［内容］町内外で働く大人（大学生２名含む）を１０名招き、歩んできた進路選択や今の仕事のやりがいについて小グループごとにヒアリング	［生き方を知る］ ・他者の生き方や進路をみつめることを通し、地域や社会へどう関わりたいかを考える

9月～11月	<u>SIMおおつち2030</u> ［目的］町行政の事業全体を学ぶことを通して高校生年代であまり関わったことがない課題まで視点を広げて、町の持つ課題について理解を深めることと同時に、ありたい町の姿について考える。 ［内容］　町の総合計画で掲げられた事業をグループごとに調べ、削減する事業を選び、残った事業を大切にする町はどういう町なのかをポスターにまとめていく。	**［地域課題を知る］** ・町の行政課題を知り、幅広い領域から考える視野をもつ
12月	<u>三陸復興ラーニングジャーニー</u> ［目的］同様の問題を抱える三陸沿岸の市町村のまちづくりを支える事業者への視察や体験を通して、大槌町の課題解決策を考える一助とする。 ［内容］三陸沿岸で町の課題に向き合い、事業を興している取り組みへの視察やそれぞれの取り組みの理解につながる体験をグループに分かれて行う。	**［他地域の課題解決策を知る］** ・地域課題解決のモデルケースにふれ、自地域での課題解決をイメージする
１月～２月	<u>１週間マイプロジェクト</u> ［目的］身の回りにある課題を設定し、１週間で行うことのできる解決に向けての具体的なアクションを行うことを通して、次年度に行うマイプロジェクト（課題解決型探究）のイメージを掴む。 ［内容］自らの普段気になっていることから、１週間で行うことのできるプロジェクトを一人ひとりが設定し、解決できたことを振り返る。	**［自らが行う課題解決の枠組みを知る］** ・身近なテーマで小さなプロジェクトを実践し、課題解決の作法を知る

②地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け（各教科・科目や総合的な探究の時間、学校設定教科・科目等）

学校設定科目「三陸みらい探究」は１学年２単位、２学年２単位、３学年１単位とし今年度、科目開始学年の１学年では、総合的な探究の時間を１単位、「社会と情報」から１単位を代替し、計２単位で行った。

三陸みらい探究では、２学年において各生徒がテーマを設定して行うプロジェクト学習を実施する。１学年は自己理解活動や大槌町の行政課題を知る活動、課題解決の事例視察や体験活動等の機会を設定し、２学年での探究活動に向け、自身の在り方生き方と密接に結びついた地域課題への気づきを醸成する期間として位置づけている。

また、三陸みらい探究における学習評価は、今年度は魅力化評価システムを活用して行っていたが、令和２年度よりルーブリック評価をアンケートによる自己評価と教員に

よる評価で実施する。取り組みの評価については魅力化評価システムを継続活用する。

令和元年度の指導体制については、カリキュラム開発等専門家が主担当となって活動内容を検討し、各学年団と打ち合わせを行った上で授業を展開した。毎時の活動には学年団の教員全員が参加し、プレゼンテーションの作成やグループ討議、プロジェクトの立案など生徒の活動を支援した。

③地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ，教科等横断的な学習とする取組について

今年度は各教科の教員も積極的に学校設定科目「三陸みらい探究」の企画・運営に参加し、本科目が目指すもの、育てている資質・能力について理解を深めることができた。次年度以降、「三陸みらい探究」を中心に据えながら、具体的にそれぞれの教科に横断的に活かすような取り組みを行っていく。

④類型毎の趣旨に応じた取組について

地域魅力化型では、衰退しつつある地域の振興につながる取り組みを行っていく必要があると考え、魅力ある高校教育づくりと地域振興がどのようにつながっているのか、地域住民と共に考える機会として、「大槌高校魅力化構想懇談会―高校生×地域―」を行い 110 名の方が来場した。２年生以降は、生徒が個別に策定するマイプロジェクトを、地域を舞台に行うことで、地域そのものを学びの題材としながら、地域振興にもつながる取り組みを行っていく。

⑤成果の普及方法・実績について

活動の内容や状況については学校ホームページに掲載している。また、各種報道機関へプレスリリースし活動を公開しており、テレビ・新聞等で取り上げられている。

また、岩手県の教職員向けの公開授業と探究に関する研究会を開催した。40 名程度の教職員が来校し本事業の知見を共有した。その他にも県内から２校、県外から１校、また岩手県議会議員文教委員会の視察を受け入れ、積極的に知見や現状・課題を発信した。

（３）研究開発の実施体制について

①地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制

学校内にカリキュラム開発等専門家と地域協働学習実施支援員が常駐し、コンソーシアムや大槌高校魅力化構想会議の運営、町行政との連携・連絡、地域と連携した学校設定科目をワンストップで行う体制としたことで、目指す理念からカリキュラムまで一貫したねらいを持って運営することができた。またそれぞれの学年にカリキュラム開発等専門家や支援員を配置することで、より生徒の実態を捉えた取り組みを行うことができた。次年度以降は教育課程編成のワーキンググループを設置し、令和３年度の変更に向け準備を行う。

②学校全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制について）

教職員は「三陸みらい探究」の授業を行うため、週に１度、事前に打ち合わせを行い、各授業のねらいや進め方について検討を行う。また各授業には学年を担当している教員も一緒に授業に参加し、班のファシリテーターなどを行っている。

また随時研修等も行っており、今年度は隠岐國学習センターの豊田庄吾氏や、東京大学教育学部教授の牧野篤氏による研修会を行って頂いた。

③学校長の下で，研究開発の進捗管理を行い，定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ，計画・方法を改善していく仕組みについて

研究開発・推進に関わる各施策は、副校長が主に担当しており、必要に応じて校務運営委員会や職員会議で諮られる。また校内教職員で行う、年度中間反省会議や年度末反省会議で成果や課題について共有し、取り組みについての意見交換を行う。

④カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について

コンソーシアムの各機関との連携を図りながら進めているところである。またカリキュラム開発については会議等で各関係機関の特色を生かした内容について意見を交わしている。具体的な取り組みについては、以下に例を示す。

コンソーシアム関係機関	内　容
町立学校	・三陸みらい探究の授業における自分紹介プレゼンテーションを高校生が中学生に発表 ・教職員の授業見学などの交流研修
大槌町役場	・三陸みらい探究「SIM おおつち 2030」実施における企画サポート ・高校生による行政事業の調査ヒアリングへの協力
東京大学大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センター	・次年度のマイプロジェクトのテーマ設定等に役立てるため、研究者の研究内容を高校生に紹介（予定）

８　次年度以降の課題及び改善点

（１）次年度以降の課題及び改善点

①目指す人材像を核としたカリキュラム・マネジメントの実施

大槌高校魅力化構想骨子で示した目指す人材像を核として、目指す人材像を育成するために必要となる教育課程の編成を行う。生徒の希望する進路や、興味関心、習熟度に合わせて、既存の教育課程の見直しを行う。コンソーシアムを基盤として、地域社会を探究的に学ぶ資源の発掘、コーディネートも積極的に行う。

②研究全体や三陸みらい探究の評価

今年度は三菱UFJリサーチ&コンサルティングが提供している魅力化評価システムを活用し、特に運営指導委員会において研究開発全体の評価を定量的に行った。次年度も本システムの継続を前提としているが、有効な検証の方法や検証の会議体の再設定など検討をする必要がある。

また学校設定科目「三陸みらい探究」の取り組みの評価や生徒の活動評価についても次年度以降は見直しをかけていきたいと考えており、継続可能性が高く、評価の有用性が高いルーブリックの策定などを検討していきたい。

③継続可能な体制づくり

今年度は事業がはじまった初年度であるが、カリキュラム開発等専門家や地域協働学習実施支援員は以前にも類似の取組を行ったことのある経験者が担っている。今後の継続のためには、属人的ではない仕組みづくりを行う必要があり、教職員との役割分担なども含め検討していく必要がある。

（２）今後のスケジュール

年　度	内　容
令和元年度 （本年度）	・カリキュラム・マネジメントの中心に据える大槌高校魅力化構想骨子を策定。目指す人材像等を明示。 ・１学年で三陸みらい探究を実施。
令和２年度 （予定）	・魅力化構想骨子の下に教育課程編成を見直し、令和３年度からの実施に向けての準備を開始。 ・三陸みらい探究を１学年・２学年で実施。 ・公営の社会教育施設（公営塾）との連携を開始。探究的な学習の放課後支援の体制づくりを推進 ・持続可能な体制の検討
令和３年度 （予定）	・改編した教育課程の実施 ・三陸みらい探究を全校で実施 ・持続可能な体制での実施

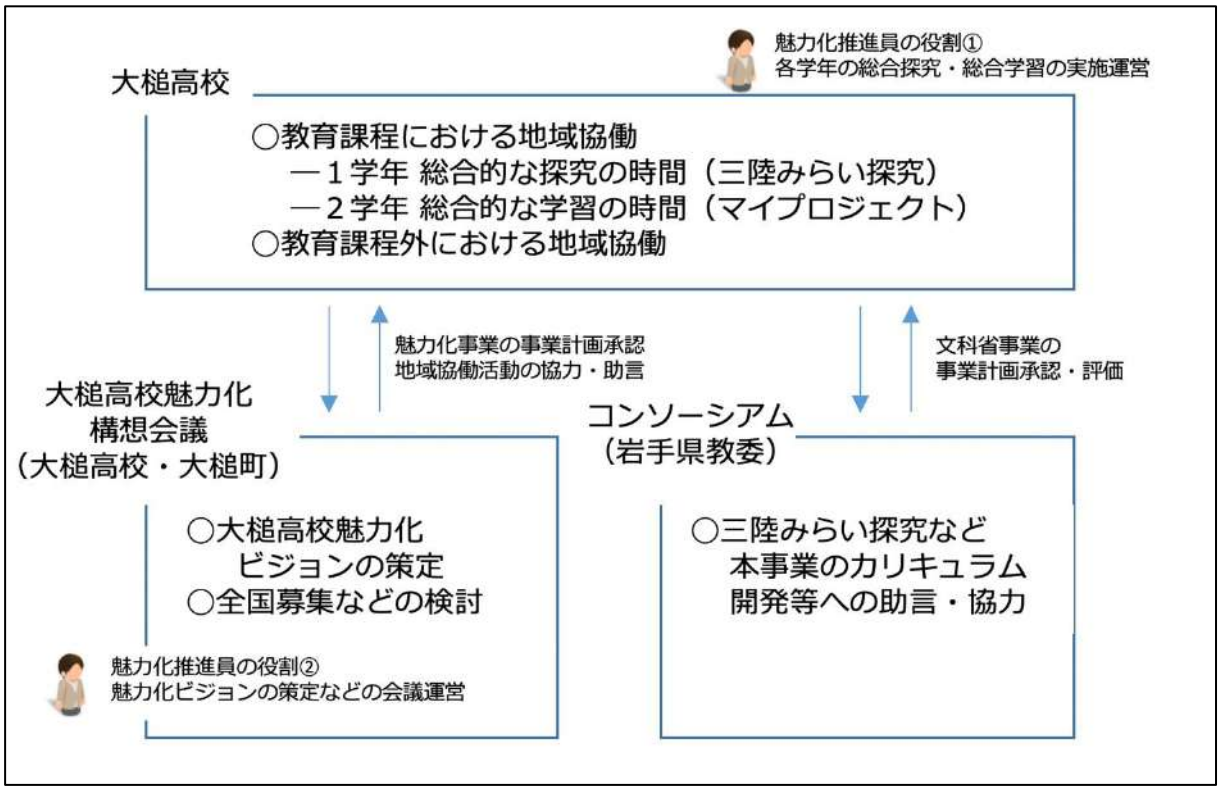
Ⅱ　研究開発の内容（詳細）

1　大槌高校魅力化構想会議とコンソーシアムについて

（1）組織体制

平成 30 年 12 月に県立大槌高校の２学級存続が危ぶまれるということに課題を感じた大槌町と本校では町が中心となり、生徒数増の施策や魅力あるカリキュラムの策定などに取り組む大槌高校魅力化構想会議を立ち上げた。

また、文部科学省の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の地域魅力化型に指定され、管理機関である岩手県教育委員会と連携を取りながら、魅力化構想会議とコンソーシアムの運営を進めている。



大槌高校魅力化構想会議の委員は、広く大槌高校の魅力化に関わる委員にご参加頂き、コンソーシアムについては、カリキュラム等に具体的な助言や関わりを行ってくださる方々に依頼をしている。以下がそれぞれの会議の委員一覧である。

大槌高校魅力化構想会議 委員一覧

番号	所属	職名	氏　　名	番号	所属	職名	氏　　名
1	大槌町	町長	平野 公三	１１	カタリバ	代表理事	今村 久美
2	大槌高校	校長	瀬戸 和彦	１２	大槌高校同窓会	会長	佐々木 亮
3	大槌町議会	議長	小松 則明	１３	大槌高校ＰＴＡ	会長	東梅 康悦
4	岩手県議会	議員	岩崎 友一	１４	大槌高校	副校長	志田 敬
5	大槌町議会総務教民常任委員会	委員長	金崎 悟朗	１５	大槌町	副町長	澤舘 和彦
6	株式会社 千田精密工業	代表取締役	千田 伏二夫	１６	大槌町教育委員会	教育長	沼田 義孝
7	大槌町商工会	会長	菊池 良一	１７	大槌学園	学園長	松橋 文明
8	一般社団法人おらが大槌夢広場	代表理事	神谷 未生	１８	吉里吉里学園中学部	校長	金野　節
9	大槌学園ＰＴＡ	会長	高木 正基	１９	東京大学大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センター	教授	青山　潤
１０	吉里吉里学園ＰＴＡ	会長	芳賀 新				

大槌高校コンソーシアム会議 委員一覧

番号	所　　属	職　名	氏　　名	番号	所　　属	職　名	氏　　名
1	東京大学大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センター	教授	青山 潤	9	（地域ＮＰＯ）カタリバ	代表理事	今村 久美
2	大槌町	町長	平野 公三	１０	大槌町立学校校長会	会長	松橋 文明
3	大槌町議会	議長	小松 則明	１１	大槌高校	副校長	志田 敬
4	大槌高校	校長	瀬戸 和彦	１２	大槌高校	事務長	藤元 衛
5	大槌町議会（総務教民常任委員会）	委員長	金崎 悟朗	１３	大槌高校	教務主任	押切 道子
6	大槌町教育委員会	教育長	沼田 義孝	１４	大槌高校	生徒指導主事	熊谷 一朗
7	商工会	会長	菊池 良一	１５	大槌高校	進路指導主事	赤崎 拓哉
8	大槌高校ＰＴＡ	会長	東梅 康悦	１６	岩手県教育委員会事務局	高校教育課長	里舘 文彦

（２）大槌高校魅力化構想会議、コンソーシアム会議報告

以下では、時系列に沿って各会議の報告を行う。

（ア） 第１回コンソーシアム会議

日時　令和元年７月 18 日(木)　17 時 00 分～17 時 20 分

場所　大槌町文化交流センターおしゃっち

協議事項

・　設置要綱案

・　令和元年度事業計画案

・　令和元年度事業予算案

・　その他

（イ） 第３回大槌高校魅力化構想会議

日時　令和元年７月 18 日(木)　17 時 00 分～17 時 20 分

場所　大槌町文化交流センターおしゃっち

目的　大槌高校魅力化に関する第２回構想会議からの経過と今後のスケジュールについて共有し、大槌高校魅力化構想懇談会（高校生×地域）の流れについて確認をする。

報告事項

・　第２回構想会議からの経過と今後のスケジュールについて

・　大槌高校魅力化構想懇談会（高校生×地域）の目的、進め方について

（ウ） 大槌高校魅力化構想懇談会（高校生×地域）

日時　令和元年７月 18 日（木）18 時～19 時 30 分

場所　大槌町文化交流センターおしゃっち

目的　大槌高校魅力化構想の地域案を取りまとめ、大槌高校魅力化骨子案を検討する材料とする。

参加者　大槌高校生、大槌高校教職員、コンソーシアム会議参加者、魅力化構想会議教育委員、社会教育委員、地域住民等（120 名程度）

次第

・　第１部　説明・報告

大槌高校の魅力化について生徒協議案の共有（10 分）

島根県立津和野高校の視察報告（10 分）

他市町村での魅力化事例の紹介（10 分）

・　第２部　地域案ワークショップ（50 分）

「テーマ　大槌高校の魅力化について」

地域として育てたい若者とは？

通わせたいと思う理想の学校とは？

高校魅力化をするために具体的にどうするか？

・　第３部　その他（10 分）

今後のスケジュールについて

（エ） 第４回大槌高校魅力化構想準備会議

日時　令和元年 10 月 28 日（月）13 時～14 時 30 分

場所　大槌町文化交流センターおしゃっち

目的　大槌高校魅力化構想骨子案について意見集約

協議事項

・　大槌高校魅力化構想案について

（オ） 第４回大槌高校魅力化構想会議

日時　令和元年 11 月 13 日（水）10 時～12 時 00 分

場所　大槌町文化交流センターおしゃっち

目的　大槌高校魅力化構想骨子の決議

協議事項

・　大槌高校魅力化構想会議設置要綱の一部改正について

・　大槌高校魅力化構想骨子について

・　今後のスケジュールについて

（カ） 第５回大槌高校コンソーシアム会議

※令和２年３月 19 日(木)の会議開催を予定していたが、
新型コロナウイルス感染症予防対策のため中止

（キ） 第５回大槌高校魅力化構想会議

日時　令和２年３月 19 日（木）16 時 30 分～17 時 30 分

場所　大槌町文化交流センターおしゃっち

目的　大槌高校魅力化構想詳細の策定に向け、高校内に設置したワーキンググループの検討の進捗状況を共有し、委員各位に広くご意見頂く機会とする。

協議事項

・　魅力化構想ワーキンググループの検討について
①カリキュラム検討②生活全般（部活動・校則等）③三陸みらい探究と地域協働
④全国募集整備

・　今後のスケジュールについて

（３）運営指導委員会 会議報告

本事業では運営指導委員会を設置し、有識者の専門的見地からご意見を頂く場としている。本年度は２回開催した。委員は以下の通りである。

番号	役　職	氏　　名
1	東京大学教育学部教授	牧　野　　篤
2	岩手大学農学部教授	廣　田　純　一
3	おらが大槌夢広場代表理事	神　谷　未　生
4	認定ＮＰＯ法人カタリバ代表理事	今　村　久　美
5	大槌町教育委員会教育長	沼　田　義　孝
6	大槌町立大槌学園学園長	松　橋　文　明
7	大槌町立吉里吉里学園中学部校長	金　野　　節
8	東京大学国際沿岸海洋研究センター准教授	田　中　　潔

以下の通り、時系列に沿って各会議の報告を行う。

（ア）第１回運営指導委員会

日時　令和元年 11 月 12 日(金)15 時～16 時 30 分

場所　岩手県立大槌高等学校

目的　今年度の地域との協働による高等学校教育改革推進事業の研究計画を共有し、事業改善に向けて運営指導委員から指導、助言をいただく。

協議事項

・　研究計画の作成に関すること
・　研究開発の展開・実施に関すること
・　成果の分析、普及、検証等に関すること
・　その他

（イ）第２回運営指導委員会

日時　令和２年２月６日（木）15 時～16 時 30 分

場所　岩手県立大槌高等学校

目的　今年度の地域との協働による高等学校教育改革推進事業の研究成果に関する評価・分析を共有し、事業改善に向けて運営指導委員から指導、助言をいただく。

協議事項

・　大槌高校魅力化に関連する事業の経過報告
・　研究開発事業「三陸みらい探究」実施報告
・　研究開発成果の分析・検証等に関すること
・　令和２年度事業計画に関すること

2　学校設定科目「三陸みらい探究」

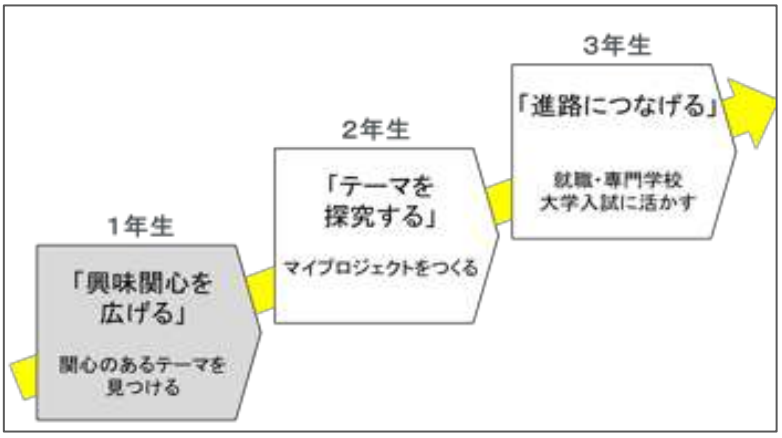
（1）概要

「三陸みらい探究」は総合的な学習（探究）の時間を活用して実施する学校設定科目である。三陸地域の復興を担うリーダーを育成することをめざし、３年間を通して身の回りや地域の課題を解決する力を身につけることを目標としている。

同科目では、大槌町というフィールドを題材に、地域課題の発見・解決に向けた活動を実施する。東日本大震災を経験した大槌町を題材にすることで、生徒は複雑多様な地域の事情や住民感情のジレンマにふれることになる。そのような状況から、自分自身をみつめ、ありたい理想の姿を描き、それを実現するための実践を行う。そのような学びを通して、今後ますます不確実性の高まる未来で生きてゆく力を育むことを目指している。

大槌町においては、震災後の生活基盤の復旧は完成を迎えている。今後は高校生が社会の構成員として主体的な意志をもち、めざしたい姿に向かい行動を起こすことも復興の姿そのものとなる。三陸みらい探究では、そうした地域におけるロールモデルの基盤となる資質・能力を形成したい。

３年間を見通した流れは以下の通りである。



令和元年度は、主に１学年・２学年を実施対象として取組を行なってきた。

１学年では「興味関心を広げる」をテーマに、自分紹介プレゼンテーションや町内外の大人による人生講話、大槌町の行政をシミュレーションするワークショップ活動等に取り組んできた。自分自身に目を向けるところから徐々に視点を社会へ広げ、町内・町外の具体的な取り組みを知り、課題解決を体験的に学ぶ機会を設定している。

２学年では「テーマを探究する」をテーマに、１～４名のグループをつくり、自ら設定したテーマで課題を設定し、解決策をプロジェクトにして実施するマイプロジェクト活動に取り組んだ。各自の興味関心あることからテーマをつくり、身近なことから始めたものでも、最終的には他者や地域など外部に波及させる活動へ発展させることをめざしている。

３学年では「進路につなげる」をテーマに、高校３年間の学びを希望進路の志望理由書や面接において表現する活動に取り組んできた。令和２年度以降、希望進路に紐づいたテーマでの探究活動や、志望を堂々と語るプレゼンテーション活動等に発展させてゆきたい。

（２） １学年 三陸みらい探究（総合的な探究の時間）

ア　概要

１学年では、自分と社会に目を向けながら心が動くテーマを探すことを目標に、自分紹介プレゼンテーションや大槌町の行政をシミュレーションするワークショップ活動などに取り組んだ。また、町内外の大人・大学生らによる「大槌発みらい塾！」を通して、自己の生き方・考え方を見つめ直す機会や自身の興味関心を広げる機会を設けた。1 月以降は、2 年次に取り組む「マイプロジェクト」を見据えた活動を実施した。

イ　年間計画

１年間を通した授業の流れは以下の通りである。

（ア）自分プレゼン（４月～６月）

総合探究を始めるにあたって、自己発見・自己理解を深めることを目的に、自分自身をプレゼンテーションで表現する「自分プレゼン」の作成に取り組んだ。また、「自分プレゼン」を町内の中学 3 年生に語ることで、より深い理解へとつなげることを目指した。

◆授業の流れ

回数	日程	内容
1	４月１６日（火）	オリエンテーション
2	４月２３日（火）	傾聴力について考える
3	５月　７日（火）	自分グラフを使っての自己理解
4	５月１４日（火）	ロールモデルの自分プレゼンを聞く
5	５月２１日（火）	自分プレゼンをつくる①
6	５月２８日（火）	自分プレゼンをつくる②
7	６月　４日（火）	自分プレゼンをつくる③
8	６月１９日（水）	自分プレゼン発表会（町内中学生に向けて）

◆オリエンテーション

オリエンテーションでは、目的と１年間の流れを説明し、自らの意志もち主体的に行動する「マイプロジェクト」を実施することへの意識づけを行った。

また授業全体を通してお互いの意見や考えを交流させる機会が多いため、心理的安心のある環境づくりのためアイスブレイク活動（人間知恵の輪・共通点探しゲーム・傾聴トレーニング）を実施した。

◆自己理解ワーク＆ロールモデルの自分プレゼンを聞く

自分プレゼンテーションのお手本として、認定 NPO 法人カタリバの職員３名に授業に参加いただいた。「私の人生を変えてくれた出会い」「過去の私に伝えたいこと」などテーマに分かれてプレゼンテーションを聞き、自分が行う発表へのイメージづけを行った。

◆自分プレゼンの作成

紙芝居形式で自分紹介プレゼンテーションを作成した。作成過程にも NPO カタリバのスタッフに協力いただき、相互発表を行いながら作成を進めた。

◆自分プレゼン発表会

【概要】

日　時：令和元年６月 19 日（水）5,6 校時

場　所：大槌高校体育館（大槌学園生徒）、吉里吉里学園校舎（吉里吉里学園生徒）

テーマ：「中学生に自分プレゼンを伝えることを通じて、自分について考える」

対　象：大槌学園９年生、吉里吉里学園９年生

（高校生２名、学園生４人程度で班を組んで実施）

【当日の流れ】

開始	終了	内容
13:50	13:58	［学園生の受け入れ］ ・整列して向かい合わせで並ぶ ・高校生生徒代表あいさつ／趣旨説明
13:58	14:08	［アイスブレイク］ ・生徒代表（ＨＲ委員：総合司会担当）
14:08	14:38	［自分プレゼン発表］ ・高校生２人目発表（６分） ・学園生より質問をうける（３分） ・高校生２人目発表（６分） ・学園生より質問をうける（３分） ・高校生３人目発表（６分） ・学園生より質問をうける（３分）
14:38	14:42	［感想用紙記入］ ・学園生は高校生活に向けて自分の感想を書く
14:42	14:45	［班内感想共有］
14:45	14:49	［全体感想共有］ ・大槌学園生徒代表２名 ・高校生徒２名
14:49	14:50	［閉会あいさつ］ ・生徒代表（ＨＲ委員）
14:50	15:00	学園生退場

【当日の様子】

大槌学園生徒への発表は本校体育館で実施し、吉里吉里学園生徒への発表は相手校へ出向いて実施した。

司会進行・アイスブレイクの運営も生徒が行い、小グループにわかれて中学３年生への発表を行った。発表後は中学生からの質疑を受け、中学生側はプレゼンを聞いてから、高校生活に向けた自分の決意をまとめる活動を実施した。

【生徒の感想】

・今までは自分と向き合うのが嫌であまり向き合えなかったけれど、この発表のおかげで自分と向き合うことの大切さを学んだ。

・前までは人に発表するのが嫌だったけれど、このプレゼンを通して、人前で発表するのは嫌じゃないということを学んだ。

・中学生の時、後悔したことを思い出せて良かった。自分としての新しい課題が見つかったので、今後がんばっていきたい。

（イ）第１回 「大槌発みらい塾！」（７月）

「大槌発みらい塾！」とは、町内外や多様な年代の方々との交流や価値観の触れ合いを通して、自らの生き方・考え方を見つめ、今後の進路・自らの未来を考えていくための材料とすることを目的としたものである。１学期、総合探究では自分と向き合うことを通じて、自分の興味関心を探るという活動を行ってきた。さらにその学習を進めるために、高校生のロールモデルとなりうる地域内外の大人を招いて話を聞く機会を設けた。

◆概要

日　時：令和元年７月 19 日（水）5,6 校時

場　所：大槌高校体育館

テーマ：「身の回りの課題にチャレンジし続ける『パイオニア』と出会う」

対　象：大槌高校 1,2 年生

◆講師・プロフィール

通番	テーマ	所属・氏名	プロフィール	出身/居住地
1	農業	FLOWER DRESS 兼沢悟氏	大槌町の山あいにある金沢地区でトルコキキョウを中心とした花卉（観賞用の植物）を栽培し、全国に届けている。	大槌/大槌
2	製造業	株式会社山岸産業 専務取締役 山岸千鶴子 氏	吉里吉里で営んでいた製造業が、震災で甚大な被害を受けたが、大槌で働きたいと思う社員の意思を受けて再開を決意した。「被災経験をもとにした新たなものづくり」として、新事業の立ち上げに挑んでいる。	吉里吉里 /吉里吉里

3	起業	株式会社鈴藤商店 兼澤幸男氏	大槌町出身。高校卒業後、船乗りとして海の上で働く。東日本大震災をきっかけに地元・大槌町に戻り、現在は猟友会に所属しマタギをしながら、ジビエを活用した起業にチャレンジ中。	大槌/大槌
4	起業 コミュニティ	一般社団法人 Tsubomi 代表 大久保彩乃氏	現在２児の母。「ママが″ママ″を理由に諦めずに、様々なことにチャレンジしていける社会を作りたい」という思いを強く持ち、母親の就労環境や女性の社会進出において、Tsubomi から社会に影響を与えていくことを目指している。	大槌/大槌
5	本・出版	一頁堂書店 木村薫氏	山形県出身。大学卒業後、東京で会社員として働く。1997 年に妻の実家である大槌町に移住。2011 年の東日本大震災によって書店がなくなった町に書店をつくるべく、震災から９ヶ月後に書店経験のない中で町内の「シーサイドマスト」に一頁堂書店を開店する。	山形/大槌
6	国際/教育	NPOe-Education 税所 篤快氏	東京都出身。世界５大陸に映像授業を届ける国際教育支援 NPO「e-Education」を創業。19 歳でバングラディシュに渡り、映像教育「e-Education プロジェクト」を立ち上げ最貧の村から国内最高峰のダッカ大学に５年連続で合格者を輩出する。	東京/東京
7	玩具	バンダイナムコホールディングス 三原 脩平氏	神奈川県出身。インターネット上で話題となったバンダイ「HG シリーズ」フィギュアの企画担当。人気漫画やアニメの中でも、コアなターゲットのみに刺さるシーンをフィギュアにして販売したところ大ヒット。	神奈川/東京

8	広告	株式会社電通 住吉 翔太氏	静岡県出身。電通ではデジタル部門・テレビ部門を経て現在、東京 2020 オリンピック・パラリンピックや聖火リレーのマーケティング担当。その他、教育 NPO の理事、静岡のプロバスケクラブの経営顧問、株主として友人の会社に経営参画。	静岡/東京
9	大学生	岩手県立大学４年 前川 美里氏	釜石東中学校、大槌高校卒業。保育士を目指している。	鵜住居/盛岡
10	大学生	東洋大学 3 年 髙木桜子氏	大槌小学校、大槌中学校、大槌高校卒業。防災やまちづくりなどを勉強し、東北の震災を伝える活動をしている。観光業志望。	大槌/盛岡

◆当日の様子

代表生徒が司会を務め、アイスブレイク等を実施した。生徒は町内外 10 名の大人から２名を選び、小グループで話を聞いた。町内の社会人からは、東日本大震災の経験や事業を立ち上げた経緯に関する内容が多く、同じ地域で高い志を持って生きるロールモデルの姿に胸を打たれている様子だった。また、町外の社会人からは海外経験や東京オリンピックに関する話などがあり、普段の生活では聞くことが少ない内容に触れることができた。

◆生徒の感想

・私は山岸さんの話を聞いて、「チャレンジ」の意味が変わりました。山岸さんは津波で流された会社を自力で再開していて、大きなチャレンジを実行しているのがすごいと思いました。勉強や部活、色々なことに対して真剣に向き合いチャレンジしたいです。

・私が思う大久保さんの印象は、「無いから逃げる」ではなく、「無いから自分たちでつくる」ことです。自分も可能性があるものだけに逃げるものではなく、何にでも挑戦してみようと思いました。

（ウ）シミュレーションおおつち 2030（SIM おおつち 2030）

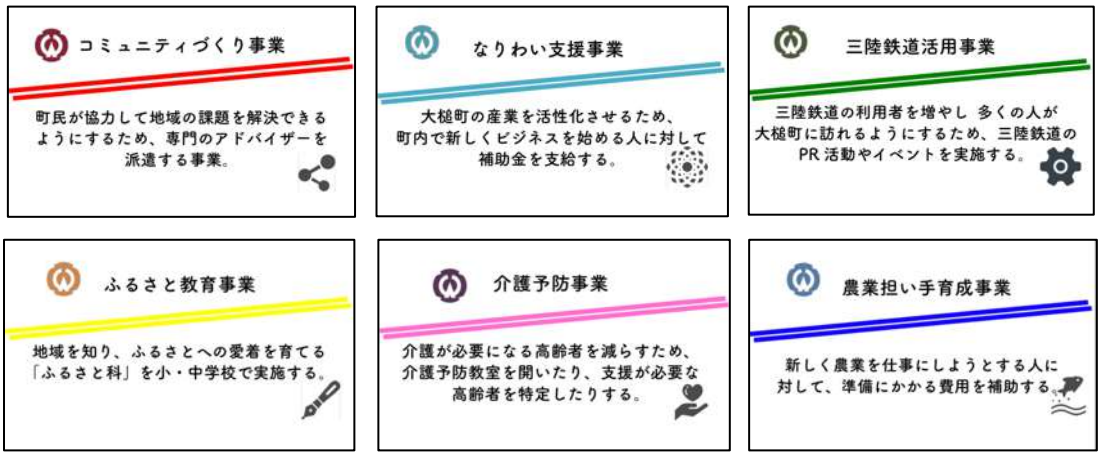
「シミュレーションおおつち」とは、大槌町の行政運営をワークショップ形式で体験するロールプレイング学習である。大槌町が実際に実施している行政事業をモデルにした「事業カード」を用い、各事業の必要性について議論しながら、大槌町のありたい姿を考える。

６人組でひとつのグループとし、それぞれの参加者は大槌町の行政部局の「部長」という役割が与えられ、少子高齢化に伴う税収減のため事業削減を余儀なくされたという背景ストーリーの中で、事業の継続・削減について制限時間内に意思決定を行う。各グループには「議会役」として、教員など大人が参加する。議会役は事業の削減を行った後のフォロー方策や住民への説明の仕方について質疑し、生徒が考えた事業削減理由と質疑応答の内容から判断し、事業削減の可否を決める。事業削減が否決された場合は負債オーバーとなり、事業削減が可決された場合はゲームクリアとなる。

《事業カード》

大槌町の行政事業をモデルにしたカード。第９次大槌町総合戦略の柱を参考に「産業振興」「まちづくり」「教育文化」「防災環境」「健康福祉」「復興未来」の６カテゴリに分類して仮想の部局とし、それぞれの部局から３枚ずつ全１８種類のカードを設定した。

事業カードの選定は学年団教員により行い、カードの内容は大槌町役場各課の助言をいただいた。



【SIM おおつちで設定した事業カードと実際の事業】

仮想 部局名	SIM おおつち事業カード名	実際の事業名（所管）
産業 振興部	有害鳥獣対策事業	鳥獣被害対策事業（産業振興課）
	ふるさと納税事業	ふるさと納税特産品贈呈事業(企画財政課)
	職業マッチング事業	雇用マッチング支援事業（産業振興課）
健康 福祉部	子ども医療費サポート事業	すこやか子育て医療給付事業（町民課）
	町民健康づくり事業	総合健康づくり事業（保健福祉課）
	地域包括ケア事業	協働による包括的支援体制の充実(長寿課)
教育 文化部	ふるさと教育事業	子供の学習支援によるコミュニティ復興支援事業（学務課）
	伝統文化保護事業	大槌町郷土芸能活性化事業補助金（生涯学習課）
	学びの奨学金事業	奨学金給付事業（学務課）
環境 防災部	地球資源保護事業	3R 推進事業（町民課/リサイクルセンター）
	消防団活動事業	消防団強化事業（総務課/危機管理室）
	三陸鉄道活用事業	三陸鉄道利用促進事業（企画財政課）
地域 活性部	コミュニティづくり事業	コミュニティ形成支援事業（コミュニティ総合支援室）
	UI ターン推進事業	おおつち移住・定住推進事業（産業振興課）
	男女平等社会事業	男女共同参画事業（総務課）
復興 未来部	なりわい支援事業	なりわい支援補助事業（産業振興課）
	水産業振興事業	水産業振興事業（産業振興課）
	忘れない 3.11 事業	忘れない 3.11 事業（総務課）

◆授業の流れ

回数	日程	内容
１	８月２０日（火）	オリエンテーション
２	８月２７日（火）	グループ分け
３	９月３日（火）	事前学習
４	９月１７日（火）	事前学習
５	９月２４日（火）	本プレイ①
６	１０月８日（火）	役場フィールドワーク準備
７	１０月２９日（火）	役場フィールドワーク
８	１０月３１日（木）	本プレイ②
９	１１月１２日（火）	大槌町の未来像を考える①
１０	１１月１４日（木）	大槌町の未来像を考える②
１１	１１月２６日（火）	大槌町の未来像を考える③
１２	１２月３日（火）	「わたしにとっての理想の大槌町」発表会 （ポスターセッション）

◆SIM おおつち 2030 事前学習＆本プレイ

SIM を実施する６人グループをつくり、それぞれのメンバーを仮想部局「産業振興」「まちづくり」「教育文化」「防災環境」「健康福祉」「復興未来」のいずれかに割り振った。

自分が担当する部局の事業（それぞれ３つずつ）について、部局担当別にわかれて新聞記事等を用いて情報収集を行い、それぞれの事業の必要性について理解を深め、ワークシートにまとめた。

部局別の学習後は再び６人グループに戻り、それぞれの事業の必要性について共有し、ジグソー法的にすべての事業の必要性について理解を深める時間を設けた。

本プレイでは実際に事業の必要性について討議するロールプレイング活動を実施した。少子高齢化に伴う税収減のため事業削減を余儀なくされたというシナリオの中で、決められた枚数「削減する事業」を各グループで決定し、議会役の教員へ説明を行った。

◆役場フィールドワーク

各事業の必要性について理解を深めるため、行政事業カードに対応する事業を実際に所感する大槌町役場職員から聞き取りを実施した。

【概要】

日　時：令和元年 10 月 25 日（金）5,6 校時

場　所：大槌町役場 多目的ホール

テーマ：「身の回りの課題にチャレンジし続ける『パイオニア』と出会う」

対　象：大槌高校１年生

【当日の様子】

生徒が各課を訪問し、担当者にヒアリングを実施した。

【生徒の感想】

・フィールドワークを通して、UI ターン事業が何をやっているのか分かっていなかったけれど、説明を聞いてすごく良い活動をしているのだなと思った。フィードバックによって重要なことを知ることができたし、もっと大槌に協力したいと思った。

・実際に役場に行ってみることで、自分たちだけではどうしてもわからないこと話を聞くことで、今までの考えとはまた違う考えを持つことができました。コミュニティづくり事業の話を聞いて、町民が安心して充実した生活を送ることはとても大事で、それをするためには人の繋がりが一番大事だということがわかった。

◆「わたしにとっての理想の大槌町」発表会（ポスターセッション）

事業調べや本プレイ、役場フィールドワークなどを通して得た学びを、グループごとにまとめる作業を行なった。最も重要だと考える事業とその順番、削減しても良いと考えた理由、どのような町をつくるべきかなどを議論して、ポスターに記載した。また、発表会に向けて自分の意見をしっかり発表できるよう練習を重ねた。

【概要】

日　時：令和元年 12 月 3 日（水）5,6 校時

場　所：大槌高校各教室

テーマ：「わたしにとっての理想の大槌町」

対　象：大槌高校 1 年生

【当日の様子】

SIM 本プレイや役場ヒアリングを実施したグループごとに、これまでの学びをポスターにまとめて 15 分程度で発表した。発表会では、県立高校の先生方や町内の役場職員・教育関係者が多数来校し、生徒に質問をしたり感想を述べていただいたりした。

【生徒の感想】

・事業を調べ、話を聞き、ポスターにまとめる作業が大変だった。今の大槌を担っているのは大人だけど、これからの大槌を担っていかなければならないのは子供たちだと思った。

・全体を通して、仲間と協力して意見を出すことと大槌をさらにどうしていけば良いのかを考えることができました。私たち高校生が主体となって大槌をさらに発展させていきたいです。

・目の前の課題に対し、課題を理解し、必要なことをまとめ、自分の意見を主張する力を身につけることができたと思います。これからの授業でも活かしていきたいです。

（エ）第２回「大槌発みらい塾！」with 慶応大学生

１学期の総合探究・総合学習では自分と向き合うことを通じて、自分の興味関心を探るという活動を行った。それらの学習をさらに深めるため、大学生から地域では体験する機会が少ない分野の話を聞き、進路選択の幅を広げる。また、今後の授業でマイプロジェクトを進めていくにあたり、大学生が行うマイプロジェクトを聞くことで自分自身への活動のイメージにつなげる。

今回は、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスと連携し、夏季休校期間に実施している「SFC スピリッツの創造（ワークショップデザイン編）」という授業の一貫として履修生（学部 1～4 年生・13 名）に大槌町に来ていただいた。受講生が大学での学びを活かしたワークショップを一から企画し、本校の生徒に向けて実施した。

◆概要

日　時：令和元年 9 月 12 日（金）3,4 校時

場　所：大槌高校各教室

テーマ：「大学生のマイプロジェクトに触れて、学ぶことの楽しさを感じる」

対　象：大槌高校 1,2 年生

◆ワークショップテーマ

・テーマ① 大槌発！最強の紙飛行機を作ろう！

「紙飛行機を遠くに飛ばす」ということを通して、理科の世界を身近に感じられるようなワークショップである。4 人 1 チームになり、折り方、材料、飛ばし方などを創意工夫して仮説を立てながら、どのチームが遠くまで紙飛行機を飛ばせるか競い合う。他のチームの観察や物理等の理論の解説も踏まえながら、自分たちなりの仮説を検証し、よく飛ぶ紙飛行機について考察する。

・テーマ② 高校生版人生ゲーム－学校はもっと楽しくなる！－

高校生活をイメージした自作の人生ゲームを高校生にプレイしてもらい、日常生活の「当たり前」について考える機会を提供するワークショップである。人生ゲームのマスには高校生活における様々な出来事が書かれており、自分の意見や考え方、態度などによってゲームの結果が変わるなど何気なく過ごしている日々の行動の意味を問い直すものとなっている。

・テーマ③ It's a small world!!～大槌から感じよう！新しい世界～

本ワークショップでは、学生によるこれまでの留学体験を聞くことや新しい言語を習得して実際に外国人とオンラインで会話を体験することを行う。留学生が多いことや10種類の言語を選択することなど慶應大学湘南藤沢キャンパスの国際色豊かな環境で学んできたことを活かして、教室にいながらも広い世界を体感できるような機会を提供する。

・テーマ④ 大槌をもっと楽しくするのは"ドローン"かもしれない！？

ドローンの飛行実演や実際の操縦を体験し、普段触れることの少ない技術の面白さを体感してもらう。また、ドローン等の技術と大槌町を結びつけながら普段の生活をより楽しくするための提案型グループワークを行う。ドローンを専門的に学ぶ大学生がアドバイスをしながら進めていくので、技術等について前提知識がない高校生にも安心して挑戦してもらう機会としたい。

・テーマ⑤ 部活動は社会貢献？～地域におけるスポーツの役割を考えよう～

学内の体育会に所属する学生らと一緒に、部活動やスポーツが社会の中でどのような貢献ができるかを考えていくワークショップである。釜石でのラグビーワールドカップの開催が控えている中で、スポーツと社会のつながりやスポーツが持つ役割について実例を紹介しながら考える。

◆当日のタイムライン

開始	終了	内容	備考
10:55	11:10	開会（場所：第1体育館） ●オープニングムービー ●慶應大学生の挨拶 ●各教室へ移動	○進行 慶應大学生2名
11:10	12:35	各ワークショップの実施	各ワークショップごとに適宜休憩をとる
12:35	12:45	閉会（場所：第1体育館） ●感想共有 ●終わりの挨拶	○進行 今村久美（慶應大学特別招聘教授/NPOカタリバ代表）

◆当日の様子

・生徒は受講したいワークショップを選択し、各教室に分かれて実施した。ドローン操縦や外国語の習得など普段触れることのない学びも多い中、年の近い大学生から教えてもらうことで意欲的に取り組むことができた。

・放課後には、大学進学希望生徒を対象に大学生との座談会を実施した。大学を選んだ経緯や高校時代の勉強の仕方、大学生活の様子などを聞くことで、卒業後の進路をイメージする機会となった。

◆生徒の感想

・現地の方と実際に電話をつなげて会話をするなどとても貴重な体験ができ、自分が覚えた自己紹介の文を伝えることができて楽しかった。中国語に全く触れる機会がないからとても良かった。

・今回の授業で、ドローンは 3 種類あり、景色をうつしたり、災害がおこっている場所で人を探したり、ものを運んだりできるということが分かりました。レースで使うレースドローンは時速 120km も出ることにびっくりしました。

（オ）三陸復興ラーニングジャーニー

本校で行う三陸みらい探究では、三陸沿岸の課題解決を担う人材の輩出を目的として活動をしている。１学期は自らの生き方の探究を行い、２学期は地域の課題を考えるために町行政の事業を題材として学習を進めてきた。三陸復興ラーニングジャーニーでは、学習の中で深めてきた地域課題を実際に解決している三陸沿岸部の取組を視察することを通して、地域で行うプロジェクト型学習の実践の一助とする。

◆授業の流れ

回数	日程	内容
1	１２月１０日（火）	事前準備
2	１２月１３日（金）	三陸復興ラーニングジャーニー本番
3	１２月１８日（火）	振り返り

◆行き先

	エリア	コーディネート	時間	ジャンル	訪問希望先
1	岩手県 岩泉町	金澤辰則氏	午前	林業	フォレストマーケティング
			午後	伝統芸能	中野七頭舞
2	岩手県 宮古市	早川輝氏	午前	観光	ゲストハウス 3710 (MINATO)
			午後	交通	三陸鉄道株式会社
3	岩手県 陸前 高田市	上田彩果氏	午前	移住定住	マルゴト陸前高田
			午後	教育	NPO 法人 SET
4	宮城県 気仙沼市	成宮崇史氏	午前	観光	気仙沼地域戦略
			午後	まちづくり	NPO 法人 MOYAI
5	宮城県 石巻市	多田有沙氏	午前	居場所	ローズファクトリーガーデン
			午後	地域産品	雄勝硯生産販売組合
6	宮城県 女川町	佐々木彰子氏	午前	起業	みなとセラミカ工房
			午後	UI ターン	日本茶フレーバーティー OCHACCO

◆当日の様子

・グループごとにバスに乗って現地へ行き、1 日を通して各地域の復興に向けた課題解決の取り組みを視察した。現地ではコーディネーターの案内のもと、午前と午後で 2 つの事業所を訪問し、話を聞いた。

・まち歩きや体験活動等を行うことで、体系的に復興の過程や各地域の新しい取り組みを知ることができた。

◆生徒の感想

・大槌町では南部鼻曲がり鮭が昔は大変有名だと聞いたので、雄勝町で硯を使って町を大きくすることみたいに地元の伝統や特産品を使って町を大きくしていくことが参考にすべきだと思いました。また、大槌の吉里吉里には、吉里吉里国などの NPO 法人があるので、雄勝町のガーデンみたいに町が協力していくことが大切だと思います。

・同じ被災地で人口が減少していて、元に戻ることが難しいという共通点があると思いました。人々が協力し、人が集まる交流の場を作ることで、大槌のまちづくりを活発にしてけるのではないかと考えました。

（カ）「第３回大槌発みらい塾！」（メディアリテラシー授業）

インターネットで SNS やニュースサイトを活用して自ら情報を得ることができる時代において、取捨選択のリテラシーがないと間違った情報を鵜呑みにしてしまう場合がある。本授業ではメディアを創る当事者をお招きして、メディアの裏側、特徴を知ることを通して、メディアリテラシーを獲得する機会としたい。

◆概要

日　時：令和 2 年 1 月 24 日（金）3,4 校時（2 学年）、5,6 校時（1 学年）

場　所：大槌高校情報処理室

テーマ：「知っておきたいメディアリテラシー」

対　象：1,2 学年　計 96 名

講　師：加藤聡氏（日本テレビ放送網株式会社）

◆当日の様子

テレビ局でアナウンサーや記者、ディレクターなどを担当してきた加藤氏から、現在のメディア環境やニュースリテラシーに関する講義をしていただいた。実際にあったニュースへの見出し付けやフェイク画像を見破る方法など実践的な活動を行うことで、メディア環境に対する理解を深めることができた。

（キ）ちょこっとマイプロジェクト

次年度に取り組む「マイプロジェクト」へのイメージをつけることを目的として、1 週間で取り組む「ちょこっとマイプロジェクト」を実施した。「自分のやってみたいこと」と「誰かを喜ばせること」の 2 点を軸に、好きなテーマでプロジェクトを立案した。

◆授業の流れ

回数	日程	内容
1	１月１４日（火）	オリエンテーション
2	１月２１日（火）	「ちょこっとマイプロジェクト」計画立案
～「ちょこっとマイプロジェクト」実施期間～		
3	１月２９日（火）	「ちょこっとマイプロジェクト」発表準備①
4	２月１４日（火）	「ちょこっとマイプロジェクト」発表準備②
5	２月１８日（火）	「ちょこっとマイプロジェクト」発表会
6	２月２５日（火）	2 学年マイプロジェクト発表の見学
7	２月２６日（水）	1 年間の活動振り返り

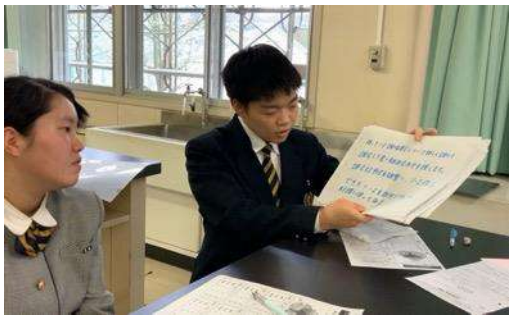
◆「ちょこっとマイプロジェクト」計画立案＆実施

生徒が立案した「ちょこっとマイプロジェクト」には、以下のような企画があった。

・校内の交流を深めることを目的とした鬼ごっこ企画
・自分と家族のお弁当を 1 週間つくる
・所属部活動の歴史について先輩にヒアリングをしてまとめる
・家族と社会問題について話し合う
・新聞を毎日読んで、スクラップする

◆「ちょこっとマイプロジェクト」発表

７名程度のグループに分かれて、「ちょこっとマイプロジェクト」の成果を紙芝居形式で発表した。また、各グループから推薦された３名の生徒が、学年全体で発表を実施した。



◆「２学年マイプロジェクト発表」

次年度に向けて、２年生が半年間かけて取り組んできたマイプロジェクトの成果発表を１年生が見学した。来年度の活動をイメージしながら２年生に積極的に質問をする様子が見られ、次年度への意欲づけの機会となった。

◆生徒の感想

・マイプロの発表を聞いて、1 年生がやっていたちょこっとマイプロと全然ちがうなと思いました。1 年生はあまり地域とかいろんな人と関わったプロジェクトではなかったけど、2 年生は、自分たちで考えたプロジェクトを、地域やいろいろな人と連携してプロジェクトを行っていてすごいと思いました。

・どのグループもそれぞれ個性が出ていて自分の為だったり周りのためだったり、それぞれが被る事がなく各々のやりたい事をやっていて素晴らしいと感じました。勉強になる事や活用してみたいと思うことばかりで、半年間の成果というものがとても強く感じられた発表だと思いました。

（３）２学年総合的な学習の時間（模擬三陸みらい探究）

ア　概要

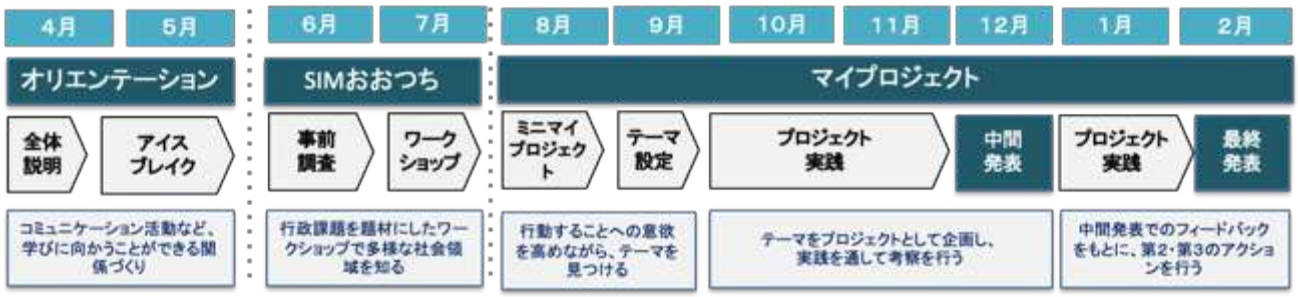
２学年では、身の回りの課題を解決する力を育てることを目標とし、生徒各自が取り組みたいテーマと課題を設定し、解決策をプロジェクトとして企画し実施する「マイプロジェクト」に取り組んだ。

１学期はテーマ設定の一環として、多様な社会の領域にふれることを目的に「SIM おおつち」に取り組んだ。２学期以降でテーマ決め・グループ分けを行い、プロジェクトを立案し実施した。１２月に中間報告、２月に最終報告を実施した。

プロジェクト活動の指導にあたり、認定 NPO 法人カタリバの職員３名に授業に参加いただいた。

イ　年間計画

１年間を通した授業の流れは以下の通りである。



（ア）テーマ設定（５月～９月）

◆社会の中にある多様な領域を知ろう：５月～６月（授業回数７回）

・「SIM おおつち」ワークショップ

大槌町の行政事業をモデルにしたカードを用いたワークショップ活動。事前学習として大槌町第９次総合計画を用いた調査を行い、町の課題や各事業の内容について調べた。その後グループに別れ、１８種類の事業カードの優先順位を話し合い、２０３０年を見通してめざしたい町の姿を現すキャッチフレーズを考え、他チームへ投票および発表を行った。

◆心が動くテーマを探そう：８月～９月（授業回数４回）

・やりたいことリスト１００を書き出してみよう＆新聞スクラップ（夏休み課題）

夏休み課題として、(ｱ)やりたいことや興味を持っているキーワードを１００個書き出した。(ｲ)新聞スクラップを行った。上記２点の課題から、自分の中にあるテーマと社会の中にあるテーマから興味関心を発散的に考えた。

・ミニマイプロジェクトに挑戦しよう（授業回数３回）

身近なテーマを設定し、１週間限定で行う個人での課題解決プランを実施する。

◆個人テーマの共有＆グルーピング９月～１０月（授業回数４回）

・心ひかれる探究したいキーワードを個人で３つずつ出し、キーワードを共有したのち、近い関心を持っている者同士で１～４名のグループをつくる。

（イ）プロジェクト実施（１０月～２月）

◆プロジェクト企画・実施

・５４名の生徒が２７グループに分かれ、プロジェクトを立案し実施した。

・授業時間はアクションの計画および振り返りを行い、授業時間外で実践を行った。

・指導に際して、認定 NPO 法人カタリバの職員３名をサポーターとしてお迎えした。

◆中間発表会：１２月１６日（木）
各チームが実施してきたプロジェクトの進捗とアクションを通した学びについて発表。
◆最終発表会：２月２５日（火）
・実施してきたプロジェクトの最終報告およびプロジェクトを通じた学びの最終報告
・大槌町長平野公三氏、東京大学大気海洋研究センター青山潤教授に参観いただき、生徒への質疑応答を行なっていただいた。

（ウ）プロジェクト実践事例
《事例Ａ「想像力は命を救う」》
・災害時の避難行動を促す防災無線アナウンスの改善に向けた活動。大槌町役場へのフィールドワークを繰り返し、独自の防災アナウンスを開発した。開発したアナウンスの効き目を検証する実験を学校内外で行い、新しいアナウンスを大槌町役場危機管理室へ提案した。

《事例Ｂ「吉里吉里大神楽保存会～より深く、より広く～」》
・大槌町の郷土芸能に関わる多様な年代へのアンケート調査、意見交換ワークショップを実施。集まった声や意見から、大槌町における郷土芸能の意義について考察した。また島根県の出雲神楽団体に所属している高校生と意見交換し、大槌町における祭りの特徴を考察した。

《事例Ｃ「１０歳若返ろうプロジェクト」》

・高齢者を対象とした民謡披露イベントを企画して実践した。メンバーで分担して高齢者の食べやすい料理や高齢者の健康管理の方法についても調査し、イベントに先立って高齢者施設での品出しを実施した。

【生徒感想】

・マイプロをやる中で将来の目標と言えるものが見つかった。この経験がなかったら、何となく進路を選んでいただろうと思う。

・プログラミングを独学して、新しいことを学ぶ楽しさを知った。学ぶほど、思い通りのものが作れるようになるのが楽しい。情報系の大学に行きたいという思いがさらに強まった。

・周りはこれを望んでいる、自分という立場だったらこうすると考えてばかりの生活だったが、みんなのマイプロを聞いて、自分の好きなことを見つめ直す、自分らしさを探す時間。

・高校に入ってから、何かに全力でのぞむことがなかったけど、マイプロ で自分の好きなことに全力でのぞむことができて、それをまとめて発表出来たことで自信がつきました。

・学生だからできないということはないし、誰だって本気でやれば必ず誰かの役に立てる。「自分がやらなくても誰かが」という気持ちがなくなり、自分から進んで動ける力がついた。

他世代での「ゆるスポーツ」体験会

プログラミング学習および web サイト制作

3　目標の進捗状況，成果，評価

本事業申請時に提出した目標設定シートに準じて進捗状況の成果を検証する。

2019年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業　目標設定シート

1．本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）

		2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値（年度）
a	（卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） アンケート調査による、下記指標に関して、4件法において肯定的回答の割合 ・課題の発見と解決に必要な知識及び技能 ・探究の意義・価値、理解地域・社会との関わり合い ・課題発見・解決への指向 ・主体性・協働性 ・価値創造への提案と次へつながる学び						単位：%
	本事業対象生徒：			80	85	90	90（2021年度）
	本事業対象生徒以外：						
	目標設定の考え方：本事業の目標は三陸沿岸部地域のリーダー育成である。本事業を通じ、自ら進んで地域に働きかけることができる力を生徒全員に身につけて欲しい。						
b	（高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） 卒業者の中で県内就職者･県内進学者数の占める割合						単位：%
	本事業対象生徒：						70（2021年度）
	本事業対象生徒以外：	56	64				
	目標設定の考え方：震災前は県外就職率は48%と高い比率であった。震災以後県内就職者が増えているが、その率を更に高めたい。また、県内に進学した者が将来県内に就職することが考えられるので、県内進学者も加味して考えたい。						

2．地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）

		2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値（年度）
a	（地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標） 外部から講師を招いて行う授業や講演会の回数。						単位：回
		19	18				30（2021年度）
	目標設定の考え方：これまで年間を通じ進路や保健衛生、金融、防災などの講演会を行ってきたが、本事業で地域の人材を活かした授業展開を日常的に行うため。						
b	（普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標） 生徒が外部団体へ本校の取り組みをプレゼンテーションする機会の回数。						単位：回
		11	11				15（2021年度）
	目標設定の考え方：復興研究会の他校交流班を中心に外部団体へ本校の取り組みを発表する機会が多いが、今後本事業を積極的に発表する機会を増やすことが望まれるため。						

3．地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）

		2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値（年度）
a	（地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標） 目標設定の考え方：大槌高校魅力化構想会議の年間の開催回数。						単位：回
			1				4（2019年度）
	目標設定の考え方：大槌高校魅力化構想会議は本事業のコンソーシアムの母体であり、運営指導委員会と連動するものである。この会議が年間、円滑に開催され事業への提言や内容の検討が行われることは活動の指標として適している。						

（１）卒業時に生徒が習得すべき具体的能力を測るものとして設定した成果目標

令和元年度は、三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティングが実施する魅力化評価アンケートを用いて評価を実施した。６月に第１回の調査を行い、２月に下記指標（文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の評価項目として設定したもの）に関連する質問項目について第２回調査を実施し、比較を実施した。

《評価対象とした指標》

１．課題の発見と解決に必要な知識および技能
２．探究の意義・価値理解、地域社会との関わり合い
３．課題発見・解決への指向
４．主体性・協働性
５．価値創造への提案と次へつながる学び

番	設問	２月	６月	差分
1	**課題の発見と解決に必要な知識および技能**	**63.4%**	**59.5%**	**3.9%**
	自分で計画を立てて活動することができる	61.0%	57.1%	3.9%
	現状分析し目的や課題をあきらかにすることができる	65.9%	61.9%	4.0%
2	**探究の意義・価値理解、地域社会との関わり合い**	**47.6%**	**71.5%**	**-23.9%**
	地域をよりよくするため、地域の問題に関わりたい	**53.7%**	**76.2%**	**-22.5%**
	誰かに言われなくても自分から勉強する	**41.5%**	**66.7%**	**-25.2%**
3	**課題発見・解決への指向**	**61.0%**	**76.2%**	**-15.2%**
	情報を、勉強したことと関連づけて理解できる	**63.4%**	**81.0%**	**-17.6%**
	地域や社会での問題や出来事に関心がある	**58.5%**	**71.4%**	**-12.9%**
4	**主体性・協働性**	**58.5%**	**65.5%**	**-7.0%**
	忍耐強く物事に取り組むことができる	**58.5%**	**64.3%**	**-5.8%**
	自分の考えをはっきりと相手に伝えることができる	**58.5%**	**66.7%**	**-8.2%**
5	**価値創造への提案と次へつながる学び**	**47.6%**	**64.3%**	**-16.7%**
	国や地域の担い手として、政策決定に関わりたい	**34.1%**	**47.6%**	**-13.5%**
	学習を通じて、自分がしたいことが増えている	**61.0%**	**81.0%**	**-20.0%**

［考察］

・ 今年度の取り組みは、地域課題の把握や分析をする取り組みが主だったため、課題分析に必要な知識技能については生徒自身が成長を感じているが、その他の項目については地域課題の難しさを知ったことにより減じた可能性がある。
・ 生徒が次に何かをしたいと思うような「主体性」や「価値創造への提案」などについては次年度に改善する必要がある。

（２）卒業者の中で県内就職者・県内進学者数の占める割合

		R1 実績	目標値(R3)
B	卒業者の中で県内就職者・県内進学者数の占める割合	55.6%	70.0%

（３）地域人材を育成する高校としての活動目標

		R1 実績	目標値(R3)
A	生徒が外部団体へ本校の取り組みをプレゼンテーションする機会の回数	２０回	３０回
B	外部から講師を招いて行う授業や講演会の回数	１９回	１５回

（４）地域人材を育成する地域としての活動指標

		R1 実績	目標値(R1)
a	大槌高校魅力化構想会議の年間開催回数	３回	４回

４　先進校視察訪問

地域と協働した学校経営や、探究的な学びを推進するカリキュラムマネジメントの知見を深めることを目的に、先進校への視察訪問を３回実施した。

・第１回視察　島根県立津和野高等学校（令和元年７月１１日～１３日）
・第２回視察　福島県立ふたば未来学園高等学校（令和元年１１月２０日～１１月２１日）
・第３回視察　　同上　　（令和２年２月４日～２月５日）

＝第１回視察＝　島根県立津和野高等学校

ア　視察概要

１．日程　　令和元年７月１１日～７月１３日

２．参加者

・瀬戸和彦（大槌高校校長）　　・藤原　淳（大槌町企画財政課長）
・木村有里（大槌高校教諭）　　・神谷未生（大槌高校魅力化構想会議委員）
・沼田義孝（大槌町教育長）　　・起塚拓志（大槌高校魅力化推進員）

イ．視察要点

■津和野高校がめざす学校経営

・「<u>やりたいこと・なりたいことに寄り添う学校</u>」がキーコンセプト

⇒学力差が大きく、進路や関心の多様な学校である。その多様さに対応できる体制を敷いている。

- 学校内の町営塾を活用した個別学習支援、AO・推薦指導
- 総合学習、進路指導、生徒募集まで生徒支援・学校支援を行うコーディネーター３名
- 関心ある分野から選択できるゼミ制の総合学習、地域活動に取り組む独自の部活動
- 県外生徒の受け入れにより、津和野町にいながらにして多様性にふれられる環境づくり

・県外生徒のアンケートで、津和野高校を選ぶ理由第一位「やりたいことができる雰囲気」

■津和野高校がめざす教員のあり方

・魅力化および働き方改革の要点として、<u>コミュニケーションの質向上</u>をめざす。そのための施策として職員室改革を行った（家具メーカーとタイアップしての内装刷新）。

- 生徒と教員のコミュニケーション
  ⇒教員→生徒の一方向的な管理ではなく、顔を向かい合わせてやりとりする対話へ
- 教員同士のコミュニケーション
  ⇒小規模校のメリットを生かし、教員間で多様なチャレンジを認め合える学校へ

ウ　視察行程

■１日目（７月１１日）

・移動（大槌町→津和野町）

・校外プロジェクト活動に取り組む生徒との対談（県外生含む）

・町営英語塾 HAN-KOH 視察

■２日目（７月１２日）

・津和野高校教員との対談（主観教諭・１学年主任）

・津和野町行政（教育委員会・移住定住部局）職員との対談

・津和野高校校長との対談

・総合的な学習の時間　授業見学

・地域系部活動「グローカル・ラボ」活動見学

・町営塾塾長（前校長）との対談

■３日目（７月１３日）

・移動（津和野町→大槌町）

１日目（７月１１日）	
7:00	大槌町役場出発
18:00	津和野町到着
18:30	**校外プロジェクト活動に取り組む生徒との対談（県外生含む）** ・県外生徒３名を含む４名の生徒との対談 ・津和野高校での学校生活や津和野高校を選んだ理由などヒアリング
19:30	**町営英語塾 HAN-KOH 視察** ・学校敷地内の同窓会館を活用し、無料の英語塾を開設 ・英語学習・キャリア教育（生徒のプロジェクト活動支援など）・AO 推薦入試対策
20:00	１日目終了

２日目（７月 12 日）	
8:50	**津和野高校教員との対談（主幹教諭・１学年主任）** ・教員とコーディネーターの協働について ・魅力化事業が生徒や学校に与えた影響について
9:40	**津和野町行政職員との対談（瀬戸・沼田・藤原・起塚）** ―津和野町教育委員会 教育魅力化担当係長、教育魅力化コーディネーター ―つわの暮らし推進課 高校支援係係長、高校支援係職員 ・高校と行政の協力体制の敷き方、予算措置について **津和野高校校長との対談・津和野高校内見学（木村・神谷）** ―授業見学（現代文・「地域で生きる」※学校設定科目） ―施設見学（職員室「センセイオフィス」）
11:30	**津和野高校校長（熊山修山氏）との対談** ・津和野高校魅力化の全体像について ・地域の高校としての役割、 今後の展望について

13:00	**総合的な学習の時間　授業見学** ・地域の大人が主催するゼミ形式の体験学習プログラム ・生徒の興味関心や大人の得意分野にあわせてゼミを設定し、午後の３時間連続で実施 ―地域の食材を使った料理ゼミ ―石見神楽のお面づくりに挑戦するものづくりゼミ ―クラウドファンディングに挑戦するプロジェクトゼミ ―天然のプールを掃除するボランティアゼミ　など１６種類のゼミを実施
16:00	**地域系部活動「グローカル・ラボ」活動見学** ・地域系部活動「グローカル・ラボ」は農場運営や地域イベントの企画などを行なっている
16:40	**部活動に関するヒアリング（津和野高校教諭への質疑）**
17:00	**町営英語塾 HAN-KOH 宮本塾長（前校長）との対談** ・町営塾 HAN-KOH の取り組みについて
18:00	２日目終了
３日目（７月 13 日）	
8:45	宿泊所出発
20:00	大槌町役場帰着

＝第２回視察＝　福島県立ふたば未来学園高等学校

ア　視察概要

１．日程　　令和元年１１月２０日～１１月２１日

２．参加者

・大槌高校（志田敬、菊池直美、鈴木紗季、野田啓志、菊池竜太、小田原理香）

・魅力化構想会議委員（高木正基）

・大槌町教育委員会（八重樫英広、黒澤直美）

・大槌高校魅力化推進員（菅野祐太、三浦奈々美）

・NPO カタリバ大槌臨学舎（宮城千恵子、村上純一郎）

イ．視察要点

■地域の復興課題を見つめる探究活動

・1 年次の「産業社会と人間」では、各市町村への訪問やヒアリングを通して地域課題の遭遇機会を設定した上で、立場や考え方の違いによる難しい課題をそのまま表現する対話劇を作成、披露する。

・2,3 年次の「未来創造探究」では、「原子力災害からの復興」をテーマに 6 つの探究班に分かれて課題設定と解決策の実践に取り組んでいる。

・開校時に作成された学校評価ルーブリックに基づき、探究学習における資質・能力の自己評価や生徒と担当教員との面談を実施している。

■カリキュラム・マネジメント

・探究カリキュラム企画開発や海外研修、県内外の高校での交流学習、各種発表への生徒参加などを担う校務分掌として「企画研究開発部」を設置。また、2,3 年次の「未来創造探究」、各学年 6 つの探究班にそれぞれ 2～3 名の教員を配置し、全教員が総合学習を受け持つ体制をとっている。

・探究学習やアクティブラーニングの発展に向けて、日常的に教員研修や探究学習に関する担当者同士の打ち合わせを実施している。

■生徒の学びを最大化させる環境づくり

・放課後のフリースペースを NPO カタリバとの連携で運営し、心のケアや居場所づくり、自習支援や探究学習のサポートなど生徒へのきめ細かい支援を実施している。

・生徒には一人 1 台のタブレット端末を貸与し、各自のレポート執筆のほかクラウド環境を利用して生徒や教員同士の意見交換等も行われている。

・教員の自発的な取り組みとして「主体的で対話的な深い学び」の実現を目的とした教科横断のクロスカリキュラムを実施している。

ウ．行程

■1 日目（11 月 20 日）

・移動（大槌→ふたば未来学園）

・「アクティブラーナー養成研修」に参加

・未来創造探究　授業見学

・双葉みらいラボ見学（職員による取り組み説明、生徒との対談）

・ふたば未来学園教員との懇親会

■2 日目（11 月 21 日）

・ふたば未来学園教員との対談

・ふたば未来学園副校長との対談

・双葉郡バスツアー（廃炉資料館、夜ノ森地区など）

・移動（浪江町→大槌）

11 月 20 日（水）：1 日目	
5：00	大槌高校発 ｜バス
10：00	ふたば未来学園着
10：30	福島県教委主催「アクティブラーナー教員育成研修」に参加 ・丹野校長より「ふたば未来学園高校の探究学習について」の講義
13：55	・ふたば未来学園授業見学 ①産業社会と人間（1 学年） 地域課題を題材とした「対話劇」の制作に向けた住民ヒアリング ②未来創造探究（2 学年）

16：10	探究テーマと半年間の活動を紹介するプレ発表会
19：15	双葉みらいラボ視察 ①地域協働スペース内カフェ「ふぅ」の見学 ②双葉みらいラボの概要説明 ③ふたば未来学園高校 3 学年生徒との対談 ふたば未来学園との懇親会 ・ふたば未来学園高校の教員 5 名 ・NPO カタリバ双葉みらいラボのスタッフ 3 名 1 日目終了

11 月 21 日（木）：2 日目	
8：50	企画研究開発部 橋爪先生との意見交換 ・総合的な探究の時間のカリキュラム設計や授業運営について ・ルーブリックを活用した探究学習の評価について ・クロスカリキュラムの実施について 南郷副校長との意見交換 ・校内での ICT の活用について ・3 年間を通した探究的な学習の推進方法について

	・探究学習や研修による教員の変化について
9：50	双葉郡バスツアー ・車窓から休校となっている富岡高校を見学 ・廃炉資料館訪問 ・夜ノ森地域（帰還困難区域）の見学 ・浪江・請戸地域の見学
11：00	浪江 IC から帰路へ
19：00	大槌高校帰着

＝第３回視察＝　福島県立ふたば未来学園高等学校

ア　視察概要

１．日　時　　令和２年２月４日（火）～５日（水）

２．参加者（４名）

・大槌高校（熊谷一郎、近藤健一、遠藤宗啓）

・大槌高校魅力化推進員（菅野祐太）

イ　視察要点

■代表生徒発表

ふたば未来学園高等学校（以下、ふたば未来）では、２年生から６つの『探究ゼミ』に分かれ、一人ひとりが目標を設定しゼミ活動（プロジェクト）をおこなっていく。発表者である鶴飼さん（３年）と渡邊さん（３年）は、それぞれメディア・コミュニケーション分野と原子力防災分野に所属しており、鶴飼さんは『商品開発を通じて福島県双葉郡をＰＲするプロジェクト』を、渡邊さんは『地域交換留学を通じて福島や地元のことを自分事で考えるプロジェクト』を発表した。発表の態度や質問の受け答え、プレゼンの完成度はどれも素晴らしかったが、それ以上に２人の発表から「双葉郡に対する風評被害を解決したい」というふるさとに対する想いが感じられた。

■分科会（第３分科会『総合的な探究の時間での協働～地域協働・外部連携～』のみ記載）

分科会では地域協働・民間連携・ＮＰＯ協働について説明があった。地域協働の説明ではプロジェクト初期の進め方に注目した。ふたば未来では、設定したプロジェクトに関わる外部の人・生徒・担当教員・コーディネーターの４者でまず打ち合わせをする。これにより、生徒はプロジェクトをより自分事として捉え、積極的に動くとのことだった。また、民間連携の説明では社会の厳しさと向き合うところに注目した。企業理念を基に、生徒と企業が一緒のプロジェクト（商品化など）を進めていくのだが、そこに一切の妥協はないため、生徒は主体性・創造力・忍耐力・責任感が身に付いていくとのことだった。さらに、ＮＰＯ協働の説明では居場所づくりの必要性に注目した。ふたば未来の校舎内に併設されている『双葉みらいラボ』では、日平均５０～６０人の利用があり、生徒たちはみな居心地の良さを求めて集い、各々やりたいことに熱中しているとのことだった。加えて、『双葉みらいラボ』は地域との交流スペースにもなっており、「新たな協働が生まれるきっかけになる」と話していた。

■校舎見学

『双葉みらいラボ』が設置されている地域協働スペースから見学が始まった。福島県は演劇が盛んということもあり、『みらいシアター』と呼ばれる小劇場型の特別教室や階段状の座席からなるユニークな特別教室があった。また、教室棟の各階にはＡＬＳ（アクティブラーニングスペース）が設置されており、校舎内の至る所に学びの場が提供されていた。さらに、バドミントン部専用の屋内施設や充実したトレーニングルームもあり、県内外から人を呼び込む強みになっていると感じた。

■『双葉みらいラボ』についての説明会

『双葉みらいラボ』の拠点長である長谷川氏より設立のきっかけと現状についての説明を頂いた。印象的だったのは現在の『双葉みらいラボ』の構造である。入りやすい雰囲気、カフェスタイルの座席配置はもちろんのこと、個人スペースや各種イベントコーナーも設置し、生徒が気軽に入れる居場所づくりに力を入れているとのことだった。また、教員とラボスタッフ間で生徒情報の共有もこまめにおこなわれており、緊急性が高い場合は管理職への報告もスムーズにできるようである。さらに、総合的な探究の時間の計画・調整分掌として企画研究開発部があることも分かった。本校では魅力化推進員を中心に授業計画を立て、各学年で検討・実施しているが、ふたば未来ではラボスタッフと教員が計画案から一緒に考えていく仕組みになっており、学年の垣根を越えて取り組んでいる様子が伝わってきた。

Ⅲ　新　聞　記　事

岩手日報　R1.10.30

町の将来、大槌高生探る

職員に事業や課題聞く

大槌

大槌町大槌の大槌高（瀬戸和彦校長、生徒160人）の1年生43人は29日、町役場で、町の事業の狙いや仕組み、課題を聞き取るフィールドワークを行った。本年度始まった授業「総合的な探究の時間」の一環で、生徒は12月に「大槌町のありたい姿」と題し成果発表する。

生徒は震災復興、教育、産業振興など分野別の6班に分かれ、各担当課室の課長、班長ら職員約30人に質問。事前に調べた震災伝承の取り組みやコミュニティーづくりの現状、UIターン推進事業などについて聞き取り、熱心にメモした。

中には、震災伝承に関し「高校生の中には、もう忘れたいとの意見もある」と問い掛ける生徒もいた。担当する、おしゃっちの北田竹美所長は「記録として残し、悲劇を繰り返さないため、津波を知らない世代に伝えていくことが町の使命だ」と説いた。

同授業は、入学者の減少が続く同校の現状を打開するため、町が本年度から本格的に始めた大槌高魅力化事業の取り組みの一つ。生徒が地域課題の分析や解決策提案に挑戦する。

小国輝さんは「普段は聞けない（町職員の）狙いや思いが分かった。自分たち若者も町の将来を考えていきたい」と意欲を高めた。

町職員から町の事業の狙いや課題を聞き取る生徒ら

R1.12.04

岩手日報
（第3種郵便物認可）

町の未来像を考える

大槌高生、事業など提言

大槌

大槌町大槌の大槌高（瀬戸和彦校長、生徒159人）の1年生42人は3日、地域課題の分析や提案に取り組む同校魅力化事業の一環で、今後町が力を入れるべき事業などを提言した。

発表会を同校で開き、町民や県内の教育関係者ら約50人が参加。生徒は10月に町職員から町の各分野の事業について狙いや仕組みを聞き取るフィールドワークを行っており、その内容を基に議論し、7グループに分かれ提言を発表した。

提言はコミュニティーの形成、伝統文化の継承、東日本大震災の伝承、古里教育の充実など。「人と人が関わり合うことで住民の健康づくりや子育てなど地域でできる活動が増え、町の事業が減る」などの意見が出た。

発表会を終えた藤原綾さんは「地域のつながりが弱まっている。コミュニティーがあれば災害時にも高齢者への避難呼び掛けや助け合いができる」と思いを込めた。

平野公三町長は「これからもまちづくりに参加してほしい」とし、町職員向けにも発表する場を設け、町の事業運営の参考にしたい考えだ。

大槌町の力を入れるべき事業などについて提言する大槌高の生徒

019年（令和元年）12月17日（火）　毎　日　新　聞

大槌高生 三陸復興を学ぶ旅

9年目の被災地

岩泉～石巻6カ所訪問 まちおこし策 提案へ

県立大槌高校（瀬戸和彦校長）の1年生約40人が13日、三陸沿岸で交流人口拡大などに取り組む先進事例に学ぶ「三陸復興ラーニングジャーニー」に参加した。【中尾卓英】

東日本大震災からの復興を担う人材を育成する同校独自カリキュラムの一環。地域資源を生かしてまちおこしに取り組むU・Iターン者らの案内で、生徒たちは岩泉町から宮城県石巻市まで被災地6カ所に分かれて訪問した。

カツオやメカジキの漁獲量日本一を誇る同県気仙沼市では、仕事や暮らしの体験学習「気仙沼ちょいのぞき」について学んだ。担い手不足や空き店舗の増加に悩む水産業や商店街の活性化にヒントを探した。

製氷業者では魚介類などを使った彫刻などを観光資源にする取り組みについて学んだ。黒沢直輝さんは「出身地の大槌町赤浜にも、鵜葦島や広大な海といった宝物がある。カレイやハゼ釣りが好きなので何ができそう」。商店街の空きスペースで映画上映会や飲食屋台を提案した若者に刺激を受けた篠崎愛華さんは「大槌の移り変わりを記録する定点観測を通じ、復興に多くの人が関わってきたことがわかった。私たちだからこそできるまちおこしの提案をしたい」と話した。

同校魅力化コーディネーターの菅野祐太さん(32)は「大槌とも共通する課題が山積する中、新しいことにチャレンジをする人たちに学べた。今春からの学習成果を、町の課題解決策・マイプロジェクトにまとめていく姿を見守ってほしい」と、生徒たちの変化に目を細めた。

製氷業者で氷の彫刻を見学する大槌高校1年生ら＝宮城県気仙沼市で

岩手日報　R1.12.15

旅して学ぶ復興の軌跡

被災6市町で 大槌高生

陸前高田

大槌町の大槌高（瀬戸和彦校長、生徒159人）の1年生約40人は13日、陸前高田など6市町を訪問し、東日本大震災被災地のまちづくりを学ぶ「三陸復興ラーニングジャーニー」に取り組んだ。「総合的な探求」の授業の一環で、町外の取り組みから同町の課題解決を考えた。

岩泉町や宮古市、宮城県女川町など6市町に分かれてフィールドワークを実施。小国元気さん、小国輝さん、岡谷美海さん、中村有沙さんは陸前高田市広田町のカフェ「彩葉」を訪問。移住者でオーナーの野尻悠さん(25)、同町を拠点に活動するNPO法人SETの岡田勝太さん(27)、上田彩果さん(26)らと懇談した。

生徒たちは開店までに大変だったことや今後の取り組みを熱心に質問。野尻さんは「いろんな世代の人が交流できる居場所にしたい」と語った。生徒は市内の民泊修学旅行の受け入れ家庭も訪ねた。

中村さんは「陸前高田は移住者が多く、民泊などいろんな活動をしている。大槌のいいところ、大切なものを考えたい」と思いを巡らせた。

カフェの話や移住者の思いなどを聞く大槌高の生徒たち

同駅の産直には組合員の作った旬の野菜や菓子、小物が並ぶ。2020年度には宮古盛岡横断道路の事業化区間の開通を控えており、今後は遊具の設置やイベントで「目的地型」の店づくりに力を入れる。藤田店長(51)は「休憩だけでなく目的を持って立ち寄ってもらう道の駅を目指したい」と意気込む。

か今日こんなことになるとは夢にも思わなかった」と喜び、孝子さんは「小豆や野菜を買った。なんでもあるから食事会の後も買っちゃうかも」と楽しんだ。

まちだより

毎日新聞　R2.2.17

毎　日

高校生が身近な課題解決策

大槌など全国へ

盛岡で「マイプロ」県大会

高校生が身近な課題解決策に取り組む「マイプロジェクトアワード」県大会の参加者＝盛岡市松尾町で

高校生が身近な課題の解決策を考える「マイプロジェクトアワード」県大会が16日、盛岡市松尾町の河南公民館であった。県内12校から昨年の3倍に当たる52の個人・団体の約100人が、探求学習の成果を発表した。

3月末に東京都である全国大会に進んだのは、団体部門で①「想像力は命を救う」（大槌高）②「吉里吉里大神楽保存会～より深く、より広く」（同）③「子供に安心を～貧困から解決する子ども虐待」（大船渡高）。個人は「煌めき～唯一無二の遠野の花火」（遠野高）。

プレゼンテーションでは廃止の危機にあるバス路線や、子ども食堂、いじめ防止など現代的なテーマもあった。

震災語り部活動に取り組む大槌高2年、佐々木朱里さんは発表後に「小2の時、町民が叫び声を上げて流される様子を避難した高台から見た体験を話した。避難勧告などが出たらすぐに安全な場所に逃げること、事前に家族で話し合っておくことなど、悲しい思いをしてほしくないというメッセージが伝わった」と、今後も活動を続ける意欲を語った。

マイプロは震災をきっかけに、子どもたちに学習支援を行う認定NPO法人カタリバ（東京）が2013年度、大槌町で「町の将来に役立つことをしたい」との声が上がったことからスタート。翌14年度からは全国各地に広がり、地区予選で選ばれた取り組みを全国コンペで競う大会に成長した。【中尾卓英】